
Laco ~ 僕らの運命 ~

10Time

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L a c o 〱 僕らの運命〱

【Nコード】

N 7 7 5 2 Y

【作者名】

1 0 T i m e

【あらすじ】

全ては、俺の所為なんだ――。ある時、突然友人が学校に来なくなつた。数日後、再び目にした友人は別人で……？ 主人公は本当の友人を探す為に国内一、人口の多い都市『本都』へ足を踏み入れる。そこで待ち受けていたモノとは――？

——時は、よく分からない。

何も見えなし、何も聞こえない。真っ黒に染まった世界——。

俺は一人、暗い闇の世界を彷徨っている。

もうあの日には戻れない。

二度と光を見ることはできない。

全部、俺の所為だ。俺の所為。俺の…。

闇の中では忌まわしい記憶しか飛び交わない。

嬉しかった事、面白かった事、楽しかった事…。

それが全て闇へと変わり、闇へ奪われてしまう。
あの日の日常は夢だったのか、幻だったのか、現実だったのか分からない。

今、俺は何をしているのだろう…。

少しずつ現実を取り戻しているものの、こんな考えをしてしまう時がある。

もう戻れない。戻ることはできない。あの日に戻ることはできないんだ。

そう自分に言い聞かすが、やはり忘れる事はできない。

一番楽しかった時間を——。

もし、この世界に神がいるというのなら一つだけ願いを叶えてほしい。

『もう一度、俺に光を与えてほしい』

この願いが叶うというのなら俺は毎日その願いを思い続ける。

また、光を見るために——。

……ーンコーン…。

薄ら聞こえてきた鐘の音で暗い世界から光の世界へとフェードインする。

どうやら俺は知らないうちに眠りについていたようだ。

黒板には一見、小説のように見えるがそれが小説なのか詩なのか分からない文がずらりと書かれている。

現代文か。それを見て一瞬で閃く。

一体どのあたりで寝てしまったのだろうか？

担当の矢部春幸やへはるゆきは寝ていたのを気にしなかったらしい。

起きた時には既に姿が見えなかった。

どうせノートに写すだけの授業。つまらないと感じてうつ伏せになり、そのまま……。

何となくその眠っている最中、懐かしい頃を思い出していた気がする。

しかし、もう思い出すことはできない。

どうして夢とはすぐ忘れてしまうものなのだろうか。

「うつそお！？ あっははは」

突然、耳に入る女性の声が聞こえたと同時に辺りのノイズが大きくなる。

俺には関係のない話し。クラスのみんなは席を立ち、友達と輪をつくって話をしている。

休み時間——。

周りの話し声が過去を思い返されるようでちょっと切なく、鬱陶しいと感じる。

隣りに座る席の人はいない。空っぽの席。

数日前まで、そこに座っていた人がいた。

優しく、明るくて、一緒にいると楽しいと思える存在の人。

何の相談もなく、突然その人はここへ来なくなってしまった。

クラスのみんなはその事を話題にしない。誰も心配していないのだ。もし心配している人がいたとしても、『どうせ風邪でも引いたのだろっ』くらいにしか思わないだろう。

俺には分かる。なぜ、突然その人は来なくなってしまったのか。それは全部、俺の所為だからだ。

俺は、大切な友人を”助けられなかった”。

窓側の一番前の席で、頭を抱え込みながら自分の不甲斐なさに嫌気をさす。

席の後ろからは耳に障る嫌な話し声が飛び交っていた。

「あいつ今日も来ねえなー」

「もう来ないんじゃない？」

「そうだな。死んでるかもな！」

ふははははは。

数人の男子がまるで自分に向かって発しているかのように笑う。

俺はその笑い声に腹が立ち、ぶん殴ってやろうかとも思った。

しかし、俺にはそのような殴れる勇気がない。

俺は、弱い――。

次の標的は自分なんだ。そう感じた。

――バアンツ――！！

爆弾でも爆発したかのような大きく耳に響いたその音は、教室のドアを開ける音だった。

反射的に振り向くと黒板手前の出入り口から金髪に、黒いライダーズジャケットとそれに似た色のジーンズを履いた男が教室へ入ってくる。

他に、男の後ろにいた仲間とみられる若者たちもぞろぞろと教室へ入ってくる。

その数、十数人――。

この学校は基本指定制服なのでその格好を見れば本校の生徒ではないと一目で分かる。

それから数秒も経たない内に教室内は沈黙と化した。

一番最初に入ってきた男がリーダーなのだろうか。

格好や漂っているオーラからすれば誰もがそう見えるだろう。

しかし窓側の席でもあり、その男の顔がよくわからない。

だが、誰かに似ているような顔つきだ。

男は教室中を見渡す。

その目は遠くからでもわかる、——鋭い目つき。

この人たちは一体何者で、何をしにここに？

そう思ったとき、男が小さな声で何かを呟いた。

「殺さない程度にな」

そう聞こえた。離れていても確かにそう聞こえたのだ。

どうということなのか頭の整理がつかなかった。その瞬間——

「おらあああああ！」

静かな空気に突然、教室全体に響き渡る音が流れる。

それは男の後ろにいた仲間たちが出した声だった。

男の仲間は一斉に走り出し、特定の男子を捕まえだす。

男子等は、まさか自分たちに来るとは思ってもいなかったようであつさりと若者たちに取り押さえられた。

「オラッ！」

その声と共に、鈍い音が耳に入る。

運動マットに拳を勢いよく食らわすような音。

若者の蹴りや殴りが取り押さえられている男子等に降り注ぐ。

「あうッ！」

男子は抵抗もできなく、無惨にやられていた。

それを間近で見た女子は悲鳴を上げ、混乱に陥る。

特定の男子は殴られ、蹴られ、既に蹲っている者もいた。

「おい。こんなでくたばってんじゃねエぞ！」

床に蹲っている男子の襟元を締め上げ、殴る。

数分経つても尚、暴行は収まらない。

若者たちは手加減を知らないのか、容赦ない攻撃を休みも無しに繰り返していく。

「誰か助けうッ——！」

助けを求めてもこの人数だ。

クラスで一番力の強い男子でも止めに入ることができず、ただ茫然

と見つめることだけしかいらなかった。
誰もがそうだ。

周りにいるみんなは助けようともせず見つめているだけ。

「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめうッ……！」

男子等はわけもわからず謝り続ける。しかし、そんなのは通用しない。

辺りには赤い液体が飛び散っていた。

この数分で、さっきまで普通だった男子の肌の色が血の色で真っ赤に染まっていた。

それを見た女子は悲鳴を上げながら誰かに助けを求めに行ったり、泣いていたり、顔を背けている者もいる。

自分だってそうだった。

あの赤く染まった顔を見た瞬間、すぐに目を閉じてしまった。

一体この男たちは何なんだ！？

なぜこの男子等をこれほどまでに痛めつけるのか。

何か悪いことでもしてしまったからなのか？

——！！

ある衝撃が頭の中に走る。

偶然……？ いや、計画的な犯行——。

よく見ると暴行を受けている男子は皆、はねだたかふみ羽田隆文と一緒にいる者だった。

そこには隆文の姿もある。

もしかするとこれは……。

嫌な考えが浮かび上がり、リーダーと思われる男の方へと目を移した。

「……！」

なんだ……？

男は暴行されている男子等の方ではなく、此方に目を向けていた。

「もついいだろう。そこまでにしとけ」

目が合ったと同時に男は口を開き、若者たちに暴行をやめるよう指

示した。

仲間たちは大人しく暴行をやめ、男の許へ戻る。

すると男は威圧的な雰囲気醸し出し、隆文に近づいて何かを呟く。興味本位で駆けつけてきた野次馬の騒めきがその声を掻き消し、よく聞き取れない。

そして男は呟き終わると隆文のことを数秒見据えて踵を返した。

暴行された男子等は鬼を見ているかのようにガクガクと震えている。彼は一体、隆文に何を言ったのだろうか。

そんなことを思っているうちに男の仲間とその男が教室から出て行くこうとしていた。

「あつ……」

俺は何故かその男に声を掛けようかと迷っていた。誰なのか確かめたい。

目が合ったあの一瞬だけじゃ、よくわからなかったから。

「ちよつと待った!」

俺は走り、男に近づく。

もう引き下がることはできない。

声を聞いた男は立ち止まる。

その後ろ姿はやはり似ている。

「勇人……、だよな?」

そう。数日前から学校に来なくなったしゅんどうはやと春藤勇人の姿に。

勇人であつてほしい。そう心で願う。

そして、男は振り返った。

「——!??」

驚きで何も声が出せず、訳が分からなかった。

男の表情からは先程のような威圧が消えていて、その瞳は凍ったように。まるで意識が無くなった人のような目をしていた。

その目は何を訴えているのかは分からないが、それが酷い悲しみを背負っているかのように見えた。

「——すまん」

「えっ？」

男はそう言つと教室から立ち去っていく。

しかし俺はあの瞳を見た瞬間に言葉を失い、何も考えることができず、男を止める事ができなかった。

それから数分後、生徒達の悲鳴を聞いた職員が通報した警察が駆けつけてきたが、男等とはつくに消息を絶っていた。

被害者男子五名。軽傷一名、重傷四名。

重傷者四名については、すぐに病院へ運ばれ意識が回復しているらしい。

これは暴力団による犯行とされ、速報ニュースにもなり警察は捜査をしている。

画面に映っているアナウンサーは「恐ろしい」やら「なぜこんな人がいるのか」などと言っている。

その発言に苛立ちを感じ、テレビの電源を消す。

自分の部屋へ移動するとベッドへ横たわり、つい先ほどの光景を思い返す。

教室中に飛び散った赤い色。赤く染まった顔。後ろ姿。凍った瞳。

俺はあれから男の顔が頭から離れなく困惑していた。

「あの顔はやっぱり勇人だよな……」

つい心の声が表に出てしまう。

でも、どうして？ 勇人は何故あんなことを？

考えるだけ考えてみる。

「……復讐」

考えて出た言葉がそれだった。

それしか答えが浮かび上がらなかったからだ。

「ごめん、勇人」

俺がもう少し強かったらこんなことには……。

それにしても勇人が見せたあの凍った瞳にあの言葉は何だったのだろ。

『——すまん』

その言葉の意味を考えようとしたが、段々記憶が曖昧になり眠りへ沈みこんだ。

高校入学から1カ月後——。

「あつ。その小説俺も読んだことある」

それが勇人と交わした最初の言葉だった。

勇人が読んでいたものは人気の本でもないただの小説。

しかしその小説には何かを引き付けるものがあり、俺もそれを読んでいたことがあったのだ。

それからその小説の話を語り合うようになり、他に趣味や話が合つてか友達と言ひ合える仲になった。

数ヶ月経ったある日、勇人は俺に不思議ことを言ってきた。

「なあ。俺とあんまり関わり持たない方がいいと思う」

その言葉にどんな意味が込められているのか、俺は分かっていた。

この数ヶ月で色々な出来事があったからだ。

俺が分かっていたことも勇人は多分知っていただろう。

勇人は誰よりも人の気持ちが良く分かるやつだったから。

だから俺は、そんな勇人から離れたくないと思い、一緒にいると決めたんだ。

これからもこの先もずっと一緒にいる、——と。

予めセットしておいた目覚ましが鳴り、夢から現実へ意識が戻る。

「夢か……」

過去を思い出してしまう嫌な夢。

ピピピピピピピ。

「ああうるさいなッ！」

俺は乱暴に目覚まし時計を叩き、ベッドから起き上がる。

部屋を出る際に外が気になり、窓から外の様子を窺う。

朝だからか少し霧が掛かっている。

その霧の所為でよく判らなかったが白い綿のようなものが降り注いでいた。

「……雪？」

それは綿ではなく、雪だった。

「ああそうか。もう、冬なんだ……」

その雪を見ていると寂しく感じてしまう。

あと数ヶ月で俺は二年生になるんだ。なんだか実感がわかない。

これから一人でやっていけるだろうか？

勇人のいない学校生活を。一人で……

「ねえ。昨日学校に暴力団が来たんだって？ それにあんたのクラスだって言うじゃない」

朝ご飯を食べている最中に母親が話題を持ち掛けてくる。

触れられなくなかった話題。

家族なので当然それが話題になる。俺は「うん」と素っ気なく返した。

「なんでそんな人たちが来たんだろう？ その暴力を受けた子たちが何か悪い事でもしたのかしらねえ？」

「俺にも分かんない。……いつてきます」

いつもは残さないご飯を残し、家を出た。

「ふうー、寒っ！」

そう独り言を呟きながら歩く。

辺りはしんと静まり返っている。

誰も通らない道――。

歩き始めてから数分経つと小さな公園が見えてくる。

いつも通っている道のはずなのに、何となく懐かしいと感じた。

それはいつも隣に誰かがいたことを思い返しそうになっていたから

なのかもしれない。

ここから先、いつも二人で歩いていた道なのだ。
でも今は……。

無言の時間。話すにも相手がいなく、学校へ着いた。

教室へ入り、いつもの席へ座る。隣に座るものはいない。

なぜなら隣りは勇人の席だからだ。

勇人が隣りになったときは嬉しかった。

嬉しくて授業中も話して先生に怒られたっけ。

それもつい最近のことだったのにな。

そういえば朝会の始まる時間だというのに、クラスの人数が少し足りない気がする。

隆文等の姿が見えない。

昨日、あんなことがあったんだもん。

チャイムが鳴り、同時に担任の矢部が教室へ入ってくる。

矢部は教壇の前に着くと真剣な表情で口を開く。

「えー、みんなも知っていると思うが、昨日の件で男子五人と女子三人は欠席だ」

昨日の件――。

欠席の人よりも先に勇人の顔が浮かんた。

勇人、今何をしているのだろうか。

何れにせよ警察から逃れていることには間違いない。

男子五人――。昨日暴行された人たちだ。女子は……、良く分からない。

女子も昨日の件と言っていた。多分精神的にきたのだと思う。そう考えるのが一般的だろう。

そしてそれから、勇人の噂が校内中に流れた。

奴は犯罪者だ。暴力団の一員だ。など。

俺はそんな噂に苛立ちを感じていた。

勇人の事を何も知らないくせにペラペラ言ってる屑共め。そんなことを心の中で思っていた。

だが勇人の事を一番知らなかったのは俺だったのかもしれない。

——終業式

勇人の噂は半年程でなくなり、その存在もが消えたかのように忘れ去られていた。

あの事件以来、勇人は学校どころか俺の前に姿を現すことは一度もなかった。

当然だろう。警察も未だに捜査を続けているらしい。

この時期、そんな話を耳にし少し、嬉しかった。

まだ勇人は捕まっていない。いや、勇人が完全に忘れられていないで良かった。

「では、これにて終業式を終わります」

その言葉と共に長かったような短い学校生活の一年が終わった。

それと同時に俺はあることを決心する。

勇人がいないとこんな生活楽しくない。

だから、勇人を探しに行く、——と。

必ず見つけて一緒に高校を卒業しよう。

——時は四月に入ろうとしていた。

ここは、自分が住んでいる町とは全く逆の世界。

人や建物などテレビでしか見たことのないほど無数にある。それは恐怖にも感じた。

もしかしたらここにいるかもしれない。いてほしい。

そう心で願いながら俺は踏み入れたことのない未知の世界へ足を踏み入れる。

道を歩いていると自分も兵隊になっているかのような足音しか聞けない。

車のエンジン音も足音や人の声で掻き消され、信号音がやっと聞こえるぐらいだ。

しかし何なのだろう。人の多さで前がよく見えない。

余所見して歩くと迷ってしまう可能性がある。

そんなことを考えている内にドンツと人と肩がぶつかる。

「あつ、すいませ——」

謝るにも人に流され立ち止まることが許されない。

恐い。そう肌で感じ、人のいない所へと走る。

「……はあ……。はあ……」

着いた場所は疲れていてまだ辺りを見渡す気力もない。

規則正しい呼吸をするために何回も息を吸う。

落ち着きを取戻し、腕時計を見ると針はちょうど真昼を指していた。意外と早く本都（ほんと）に着いたな。これからどうしよう。

顔を上げ、辺りを確認する。

初めての恐怖に焦り、必死に人のいない場所へ走った結果、どこかわからない路地に居た。

ここまでどうやって来たのか……。覚えていない。完全に迷子だ。

「はあ……。俺、馬鹿だ」

自分の情けないという感情が口に出てしまう。

なにあの人の数だけでビビってるんだ――。

もしかしたらあの中に勇人がいるかもしれないのに。

だけどやはり人が恐い。そう思い、来た道を戻るのはなく路地の奥へと進むことにした。

それにしてもまだ昼間だというのに薄暗い。

奥は真っ暗で何も見えない。

闇の世界があるのではないかと錯覚してしまう。

一步、二歩と歩きたびに表通りのざわつきが遠ざかっていく。

ここはよくテレビなどで薬物の取引などが行われている場所にそっくりだ。

もしかしたらそんな取引の現場に出くわすかもしれない。頭の中はそんなことしか浮かばない。

歩いてから三分くらいすると、この道の出口らしき先が見え、歩くスピードを速める。

道を出ると異変に気づき、足を止めた。

…妙だ――。

目に見えているものは一見すると普通の居酒屋などが並んでいる通り道。しかし、人が一人もいない。

微かに人の声や自動車の走る音は聞こえてくるが、この通りにはそれらしきものが一切ない。

そして、空からの光を防いでるような建物――。

路地に入ってきたときに先の見えない闇を作り出していたいたのはこの所為だったのか。

今通ってきた路地よりも暗く感じるこの場所がどういふところなのか頭の整理がつかなかった。

並んでいる建物は居酒屋ばかり。それも、どこも明かりがついていない潰れた店。

多分ここは数年前までは盛んな通りだったのだらう。見た限りでそういうところだったというのがわかる。

しかし今は人の気配もしない。

薄気味悪い。一秒でも早く出たほうがよさそうな気がする。

再び歩き始めようとした途端、後ろから声がした。

「ねえねえ君！」

反射的に振り返る。

するとそこには男二人の姿があつた。

一人はまだ寒い時期だというのにインナーを着ていない派手な豹柄のベストに黒いカーゴパンツを着た、金髪で筋肉質な若い男。

もう一人は服装がウエイターに近い感じで顔の至る所にピアスが着いている銀色の髪をしたビジュアル系な男。

如何にも不良らしいその二人が近づいてくる。

逃げようかと考えたが、追われたら厄介だと思い、足を止める。

「ねえ、君どつから来たの？　もしかして迷子の子猫ちゃん？」

子猫…？

金髪の男が口元をにやけさせながら聞いてくる。

ここで使われている用語が何かだろうか？

いや、確か歌であつたような気がする。

迷子の子猫ちゃん…。

そういう意味か……。しかし、何やら嫌な予感しかない。

この男たちは一体どこから来たんだろう？　さっきまで人の気配は

しなかったのに。

足音さえもなかった。いや、聞こえなかった。

やはりここは逃げるしかない。それしか何も思いつかなかった。

「あの、俺急いでのので」

「じゃあ俺たちが道教えてあげるよ。どこに行きたいの？　それか

俺たちと一緒に——」

男が話している隙みて、勢いよく後ろに足を走らせた。——が。

「うあッ！」

それは呆気なく失敗する。

金髪の男は逃げる事を予測していたのか俺の腕をすぐに掴み、その

勢いで地面に思い切り倒れた。

「馬鹿だなあ。逃げようとしてることぐらいわかってんだよ」

「……ッ！」

倒れたときに負った腕に痛みが走る。

そして、黙り込んでいたもう一人のビジュアル系の男が側に近寄り口を開いた。

「それじゃ、逃げようとした罰を与えますかあ。ギヒッ！」

男は不気味な笑い声を出す。

その瞬間、男二人は突然襲い掛かり、金髪の男は両腕を。ビジュアル系の男は両脚を掴み自由を奪う。

俺は体の自由を奪われながらも必死に抵抗しようと我武者羅に体を動かす。

すると、何やら金髪の男はベストの内ポケットから何かを取り出そうとしていた。

「そんなに暴れると、逝っちゃうよあ？」

ポケットから取り出されたのは果物ナイフ。それを間近で見せつけられる。

「う……」

果物ナイフは徐々に喉へと近づき、危険を感じて抵抗するのを諦めた。

「そうそう。子猫ちゃんは大人しくしないなあ。キヒッ」

男は両脚に自分の脚を絡ませて固定する。

下肢に違和感を感じ、そこへ視線を移すとビジュアル系の男が厭らしい手つきで太股を擦っていた。

「なに……。やめ……」

男の手は徐々に物の方へと移動する。

「さ、触んなッ！！ 嫌だ！」

こんな経験は人生で一度もないので恐怖に感じた。
怖い怖い怖い怖い。

犯される。——殺される！

「いいねえ。感じちゃってる？」

金髪の男は、ナイフを喉元に押し当てながらゾワツと来るような声で耳元に囁く。

抵抗することのできないこの状況をどうにかしたかった。

逃げる方法はないのか！？

そう考えてるうちに力チャツという音が聞こえ、目をやると銀髪の男の手がベルトを外そうとしていた。

「やめろッ！」

「うつせえなあ。そんなに死にてえの？」

金髪の男は皮膚が切れそうならいにナイフを喉元に押し付ける。

もう駄目だ。ここで犯されて死ぬんだ……俺…。

誰でもいい。誰か助けて！

—— 勇人ッ！！

俺は頭の中に思い浮かんだ勇人に助けを求めた。しかし、ここは人通りが少ない。勇人以前に誰も助けに来る人はいない。

もう諦めよう。そう思った瞬間だった——

「何してんだよッ！」

どこからか怒鳴るように響いた男の声が聞こえたと思うと、二人の男は舌打ちをしてどこかへ走り去っていった。

恐怖から解放されたからか、安心すると体から力が抜け落ち、俺は起き上がることを忘れていた。

助かった——。

すると走る足音が聞こえ、それはすぐ側で止まる。

「おい、大丈夫か！？　しっかりしろ！」

「……ん」

誰かに呼ばれ、目を開ける。

なんだか体が宙に浮いているような感じだ。

誰かが俺の背中を支えてくれている。

その支えている手が優しい——。

気が付くと目の前にいた男の人と目が合った。

「大丈夫なようだな。お前、名前は？」

「……航^{コウ}」

てつきり勇人だと思ったが、男の顔は見知らぬ顔だった。しかし、なんとなく危険を感じないと思い、つい名前を口にした。

「航、か。立てるか？」

男は肩を貸して、航は何とか立ち上がる。

「あ…、ありがとう」

航は礼を言つと、その男の人を見つめた。

よく見ると、顔は整っていて身長は百八十センチはある。

明るいブラウンの髪色をしていて、左耳には銀色のステンレスピアス。黒色のPコートにそれに合ったジーンズが大人の香りを出している。

男も航の様子を見ていた。そして、口を開くと同時に手を前に差し出す。

「俺は迅速^{ハヤミ}だ」

何かと思つたがすぐに理解し、躊躇いながらもその手を握る。

すると迅速は笑顔を浮かべた。

多分、これがこの人独自の挨拶なのだろう。

航は慣れない環境に混乱する。

何やってるんだろう、俺…。

「で、何であんな奴らに絡まれていたんだ？」

「えっ?!」

唐突な質問にどう答えればいいのかわからなかった。

「分からない。人のいない場所に行こうとしたんだけど、そしたらここに辿り着いて、さっきの奴らが…」

「ふむ。そーいうことか。んで、ここがどこなのかわかってるのか？」

迅速は叱るような口調で航に訊く。

「…いや」

「そしたら迷子か!」

「別に迷子になったわけじゃないけど…」

間違ってもいないので何とも言い返すことができなかった。

「ははっ。別に気に障ることじゃねえだろ。迷子は誰にだってある！ けどな、ここだけは気をつける。いや、ここだけでもないんだが」

迅速のその言葉には真剣さが感じ取れた。

しかしよく理解できない。ここだけは気をつけるってどういうことだろう。

航は気になることを訊いてみる。

「あの、ここってどこなんですか？」

「ん？ ここは夜蝶二番通りってところだ」

「夜蝶二番通り？ そこって有名な通りじゃ…？」

「昔わな。今は色々な事件があつてか誰も寄り付かなくなった、ゴーストストリートってとこだ」

「ゴーストストリート——」。

ここが、あの有名な…。

それを聞いてわかった気がする。なぜさっきの奴らが俺を襲ったのか。

夜蝶二番通り。

数年も前の話だが、いつの頃からか同性愛者という者たちが集まるような場所になり、国内でも盛んな通りだったという場所。テレビで時々映し出されていたので記憶に残っていた。

しかし、国内でも有名だったこの通りがこんなにもなる事件って一体…。

不意にある疑問が浮かび、訊いてみる。

「どうして迅速はこんなところに？」

「俺か？ うーん…。 ”人探し” かな」

迅速は顎に手をやり返答する。

何やら答えたくなかったような質問だったらしい。

別にそれぐらいでどうかかなるとかの話でもないのに。

「さてと。こんなところにずっと居座んのもあれだし、ここから出るぞ」

迅速は話を受け流すようにそう言って歩き始める。

「どうした？ 早く着いて来い」

そう言われるが、航は足を前に出せずにいた。

もしここで迅速を信じたとして、着いていくと何が待ってるのか。またあんな恐怖を味わいたくない――。

だから今知り合ったばかりのこの男を信じていいのだろうかと困惑している。

見た限り優しそうだし、助けてくれたけど。でも、どこかさっきの奴らと同じなんじゃないかと疑ってしまう。

どうにも決断することができない。

「なあ。無理に信用しようとしなくてもいいんだぞ？ 俺はただお前をここから出したいだけなんだ」

迅速は航のそばに寄り、真剣な目で言う。

心の内を読まれたようで驚いた。いや、ただそれが顔に出ていただけなのかもしれない。

「航。俺はお前を襲ったりなんかしない」

その真剣な眼差しに嘘はない。

「…信用、していいんだよね？」

「――ったり前だろ！ そんなじゃ、出るぞ」

迅速は笑顔で答え、再び歩き始める。

なんだろう。迅速なら信じることができそうな気がした。

航は迅速の後を着いていく。

先程まで薄暗かったこの道が段々と明るくなっていた。それに、車のエンジン音なども聞こえてくる。

やがて角を曲がると光が差し込んでいる道が見えた。

「着いたぜ」

その言葉と同時にこの闇の道の出口から明るい道へ入った。太陽の光が眩しく、辺りの色彩がはつきりするのに少し時間が掛かる。

目の前には車が沢山走っていて、人もそれほど歩いている。

薄暗い闇から抜け出すことができたんだ、俺。

まるで奇跡が起こったかのような思いが湧きだす。

元来た道を振り返ってみると人の姿はない。暗く、光を寄せ付けない何かがあるように感じる。

闇の世界——。そう言うのに相応しい場所だ。

上を見上げるとアーチ状の看板があり、そこには『夜蝶通り2』と掲げられていた。

「なあ」

不意に声を掛けられ吃驚する。

振り返ると迅速と目が合った。

「お前、ここのもんじゃないだろ？」

「えっ。ああ……うん」

住んでいる所を聞いてきたのだろう。首を縦に振り返答する。

「どこから来たんだ？」

「來^{くる}万^ま智^ち」

「來^{くる}万^ま智^ち……！？」

一瞬だが迅速の眼元がピクツとしたように見えた。

「そうか。わざわざそんな遠くからご苦労さんだな！」

急に迅速は笑顔になって喋る。

遠くといってもこの都市から電車で二時間ほどの距離である。

しかし、來万智と言った時の迅速の様子が気になる。

「それで、何しにここへ来たんだ？」

「え？ あ、いや……」

勇人を探しに来た。なんて言えるわけもない。

大体、国内で一番人口の多いこの都市で連絡とか無しに人を探すこ

となんて不可能に近い。

笑われるだけだ――。

「ちよつと探検？　みたいな感じで……。ははは」

航は笑いながら誤魔化す。

「一人でか」

「そう……だけど？」

「ほお。で、どこへ探検しに行こうとしてたんだ？　港？　渋谷？

千代田か！　それとも台東か？」

なに言ってるのかさっぱりわからない。

迅速の目は何かを見透かしている。

どうやら嘘をついていることが見抜かれていたようだ。

「いや、別に……。ただここに来たかっただけで、何も調べないで来たんだよね。ははっ」

「お前……変な奴だな」

棘のある言葉が胸に突き刺さる。

すると迅速は顎に手をやり、何かを考える表情を浮かべ出した。

数秒すると、「よしっ！」という声と同時にその手はコートの脇ポケットに入る。

「俺がお前を案内してやる！」

「？」

「遠慮はいらねえよ。どっか行きたい場所あるか？」

本当に案内してくれるらしい。

嬉しかったが、行きたい場所が思いつかない。

俺はただ勇人を探すためにここへ来たのだから。

「じゃあ、落ち着ける場所」

行きたい場所なんて今は思いつかない。それに、数分前の悪夢がまだ頭に残っていたのでそう答えた。

「落ち着けるとこ？　そんな所に行きたいのか？」

「……うん」

「んー、わかった。じゃあ着いて来い」

そう言われ、航は迅速の後に着いていった。

やっぱり君に会えることはできなかった。

今、何をしているんだ？

生きているよな？

また、会えるよな？

もうこんなこと考えるのがおかしいのか。

やがて、その記憶は途切れていく――。

——見慣れない場所。

柔らかい感触がする上に、航は仰向けになっていた。

頭には慣れない硬さの枕がある。

ここはベッドの上で、そばには窓があり外の景色がよく見える。

この位置からは黒く染まっている空しか確認できないが、そのおかげで今は夜中だと分かった。

隣には上半身裸の男が横になって寝息を立てている。その男の後ろ姿は昼に見たことのある背中だ。

航は迅速を起こさないようにベッドから抜け出し、そばにある窓から外の様子を眺める。

「……すごい」

思わず心の声が表に出てしまうほど、田舎では考えられない光景が航の目を輝かす。

そこには居酒屋やビルの灯りなどがまるでクリスマスツリーを連想させるかのような光が沢山輝いていた。

明るい所為か星は見えない。だが、街に点々とするネオンの光が航の心を落着かせる。

落ち着く場所に行きたい。そう願った。

あれから向かった先は、落ち着く場所とは正反対の騒がしいゲームセンターだった。

迅速と何所かズレてるように思えたが、そうではなかったらしい。

それから陽が暮れるまで色々なところを案内してくれ、夕飯は居酒屋で済まし、今は高そうなホテルの最上階の部屋にいる。

多分、迅速はこの夜景を見せたかったのだろう。本人は酔っていたのか部屋についた途端、服を脱ぎ出しベッドへダイブ。すぐに寝てしまった。

だけど、ちゃんと願いが叶ったんだ。落ち着ける場所に行きたいと

いう願いが。

でも他に何か、……何か願いがあったような気がする。

「はあ……」

思い出そうとしてもそれ以上思考が回らなく、溜息が出る。
今日はもう寝よう。明日、その何かを思い出せばいいんだ。

航は部屋に一つしかないキングサイズのベッドへと戻り、横になる。
スー。スー。

すぐ隣で良い夢を見ているんだなと感じとれる気持ちの良い寝息が
聞こえてくる。

一体どんな夢を見ているのだろうか。

気持ち良さそうに寝ている迅速の夢の中に入ってみたい。そう思っ
た。

迅速の後ろ姿。何か習い事でもしているのか背中の筋肉が鍛えられ
ていて男らしい。

この筋肉質の体に一瞬だけでもいいから触れてみたい。なんとなく
そんな願望が生まれた。

相手は気持ちよさそうに寝ているので少しぐらいは大丈夫だろう。

恐る恐る迅速の背中に触れてみる。

感想は、……普通だ。ただ、温かい――。

そしてそのまま手を腕の方へと動かした。

すごい――。

力を入れているわけでもないのに意外に硬くて驚いた。

しかも肌触りが気持ちいいわけ。そんなつるつるな肌にハマってし
まい、航は迅速の腕を何度か擦る。

その時、二の腕辺りらへんに一瞬、変な感触に触れた気がした。
また同じ所に触れてみるとやはり何かある。

何だろうと思い、迅速の腕を見てみるとそこには赤黒い傷のような
ものがあつた。

記号のエックスの様にも見える。というよりこれは傷なのだろうか？

……駄目だ――。

考えようとしても睡魔が襲いかかり、眠りにつくことにした。

辺りは真っ暗になり、何もない闇に包まれる。

「……………」

何となく遠くの方で誰かが俺を呼んでいる声がして、ゆっくりと目を開いた。

辺りは真っ暗で何も映し出されていない。

静穏な空気。今聞こえたものは幻聴だったのかと思わせる。

気のせいかと——と、再び目を閉じようとした時だった。

寝惚けていたからか自分の見ている光景が普通じゃないということに気付く。

視界には黒という色しか映し出されていない。灯りや物、人の影すら——。

先程まで隣に誰かが居たような記憶が残っているのだが、それが曖昧で思い出せない。

そんな中、どこからか騒がしい音が聞こえる。

音は段々とフェードインするように大きくなっていく。

よく耳を澄ますとそれは単なる音ではない。人の叫び声だ。

声の主は一人だけではない。二人……いや、何十人ももの叫び声。

その叫び声の所々に呻き声のような声も聞こえてくる。

俺は怖くなり耳を塞いだ。しかし、完全に防げるわけでもなく、まだ小さく声が聞こえる。

今度は目を瞑り、夢だと念じ始めた。

これは夢だ。これは夢だ。これは夢だ……

次第に叫び声は薄れ、そよ風が持ち運んでいくかのようにスーッと消えていく。

俺は耳を塞いでいた手をそつと離し、周りの音を確認した。

辺りは叫び声など聞こえない、静かな空気に戻っている。

もう大丈夫だろうと判断し、目を開けようとしたとき、グシャツ！という音が急に間近で聞こえて吃驚する。

それは、何かを潰したような音で、同時に地面にそれが飛び散る音も耳に入った。

ビチャツ。グチャ！

「！」

音と共に温かい何かが右腕に当たった。

怖かったが勇気を出して見てみるとそこには赤い……、真つ暗で何も見えないはずなのに、腕に付着したその赤い”血”がはつきりと見えた。

驚きのあまり、声すら出てこない。

不意に地面に飛び散る音の事を思い出し、顔を下に向ける。

「うわぁッ！」

そこには予想を上回る程の大量の赤い液体が広がっていた。

今立っている前方の辺り一面には真つ赤な血の海が。辛うじてそれは自分が立っている足場までには来ていない。

まだ間に合う――。

ここから逃げよとしたとき、どこからか声が聞こえ始めた。

薄らだが、それは目の前にある赤い海の中から聞こえてくる。

「……で……け。……けて……いの……」

ノイズが混じっているような声。

喉が枯れた声といった方が正しいのか、その声は段々と近づいてくる。

「……んで……けて……ないの？」

何かを訴えかけているようだが、話し声の途切れ途切れに泡の吹き出すような音が邪魔をして良く聞き取れない。

それを明確にする為に耳を澄まそうとしたとき、赤い海からブクブクと泡がたち始め、数秒もしない内にそこから黒い影が現れ出した。見るとそれは人間の形シテをしている。

ただ、全身が黒色で染まっている所為で顔はわからない。だが、そ

の人影は俺を見ていると直感した。

「ねえ……。なんで僕を助けなかったの？」

今度は鮮明に声が聞こえた。

まだ若い男性の声。どこかで聞いたことのある声だ。

それが、どこで聞いたのか思い出せない。

「僕を……助けないの？」

影はそう訴えかけてくるが、俺にはよく理解できない。

一体、何を訴えたいのだろうか。

「しいよ……。痛いよ。……けて、……助けて！」

「俺にはどうすることもできない……」

「何で……？ 何で、何で何で何で何で」

苦しい声を出しながら何度も黒い影はその言葉を口にする。

「……ごめん」

その影には悪いがそう口にした。

途端、影の顔の部分からギョロリと大きな目が現れ、こちらを睨みつける。

——と、同時に金縛りが起こり、身動きが取れなくなる。

まるでギリシア神話に出てくるメドウーサを想像させるかのように。

「や……めろ……」

少なくとも声は何とか出せるようだ。しかし、身動きが取れないだけでなく、苦しさも感じ始める。

何かで縛られているような感覚。体全体に電流が流れているような感じ。苦しくて、息がしづらい。

「一体、俺が何をしたっていうんだよ」

「……君が悪いんだよ。君の所為だ。君が助けられなかったから僕は……」

影は悲しい声でそう口にする。

もしかすると、この苦しみはこの影が感じている感覚なのかもしれない。

すると影は突然頭を抱え込み、苦しみ始めた。

「うあ… ああああ… あゝ あああああああ！！！！… 出せ！
思い出せっ！！」

甲高い奇声を発した後、影はキリッとこちらを睨み付ける。猫のよ
うな細い瞳で。

その瞬間、過去の記憶がフラッシュバックした。

楽しい記憶。嬉しかった事や面白かった事。そして、悲しい記憶――
。

我に返ると、再び恐怖が蘇った。

「違う。俺の所為じゃない！」

身体が小刻みに震えだす。

影の正体が誰なのか分かった気がしたからだ。

だけど、それを認めたくはなかった。だから俺はそう口にした。

「君の所為だ…。 ああ、痛いよ…。 助けて…、助け――」

影が訴えてる最中に突然、ブウンツと勢いのある風の音と同時に何
かが影を命中した。

耳に残る鈍い音が聞こえた途端、影はその場に崩れ出す。

「たす… け、て…」

最後にその言葉を発すると、黒い影は赤い色に染まり始め、海と同
化し始める。

すると、再び前方から叫び声が聞こえ出し始めた。

一体何が起こったのか分からなかったが、危険だと感じて俺はその
場から逃げ出だした。

声のしないところへ。光のある場所へ。

しかし、走っても走っても光なんて一切見えない。

それに、叫び声が追って来ているような気がした。 いや、追って来
ている。

早く。もつと早くと走るスピードを上げる。だが辺りは真っ暗で何
も見えない。何処を走っているのかもわからない。

出口なんてあるのだろうか？ このままここから抜け出せずに俺も
あの影みたいになるのだろうか。 そんな考えが脳裡をよぎる。

走り出して何分くらいだろうか。体力の限界が近づいてきていた。息が切れそうな中、辺りを見回しながら走っていると、目の先に黒ではない色が浮かんでいるのが見えた。

やっと出口に辿り着いたんだ。

そう思い込み、嬉しさが込み上がる。

だけどそれは絶望へと落とすものだった。

「なんなんだよこれは」

その色を見た瞬間、膝が竦み、地面に倒れ込んだ。

そこにあつたのは先程の大量に飛び散った赤い液体。

「もう、終わりだ」

後ろからは叫び声が近づいてくる。

絶望へと落とされ、立ち上がることもできない。

俺、どうなるんだろう。

やがて姿の見えない声の主たちが目の前まで迫り、自分を取り囲む。まるで籠目だ。

すると声が止み、辺りが静かになる。しかし誰かがいる気配は変わらない。

そして背後から誰かが近づいてくる気配がした。地面に金属バットを擦るような音と共に――。

殺される。そう確信した。

ニヒイ。

奇妙な笑い声が聞こえたと同時に死を覚悟し、俺はギュッと目を瞑った。

静かな空気に温かいものを感じて、ゆっくりと目を開く。

辺りは光というもので明るく、周りの物を鮮明に映し出していた。

航は身体をゆっくりと起こし、溜息をつく。

「夢、だったんだ……」

また嫌な夢を見てしまったと、頭を抱える。

最近、悪い夢を見ることが多くなっている気がした。

「…暖かい」

窓の方に顔を向けると、外からの光が照らし出していた。

そのおかげか夢のことなどすぐに忘れ、次第に意識を取り戻す。

隣りを見るとそこには誰の姿もなく、部屋には自分一人だけ。

なんとなく過去を思い返される。

キュツ、キュツ。

部屋の入口辺りから蛇口の止めるような音が鳴り、その後にバスルームのドアの開く音が聞こえた。

そこから出てきたのは腰に白いタオルを巻いた上半身裸の迅速だった。

どうやらシャワーを浴びていたようで、小さなタオルでごしごしと頭を拭きながら部屋に戻ってくる。

「おう起きたか。航もシャワー浴びれよ」

「えっ。あ……うん…」

航は迅速の姿を見ると安心してバスルームへ向かった。

迅速が先に入っていたからか暖かく、良い香りがする。

ゆつくりとシャワーの蛇口を捻り、温い水を頭から浴びる。

……良かった、良かった、良かった。

航は水を浴びながら、そう心で何回も連呼していた。

もう誰も勝手に姿を消されるのはごめんだ――。

そして、髪や体を洗い流し終わり、バスルームから出る。

迅速は既に私服になっていて、部屋に置いてあるテレビをつまらなさそうに観ていた。

ベッドには航の私服が綺麗に折り畳まれている。

「わざわざ折り畳まなくても良かったのに」

「ん？ ああ、暇だったしな！」

「……」

これは礼を言った方がいいのか言わなくてもいいのかよく分からない

い。

航は私服に着替え始める。

「つか、悪いな。落ち着く場所に行きたいっていつからすげえ良いもん見せようと思ったんだが……」

着替えている最中、迅速がそう口にする。

「もう見たよ」

「へ？」

「夜景、すごい綺麗だった。それになんとか気分が良くなったし。ありがとう」

「お、おう」

まさか礼を言われるとは思っていなかったようで、迅速は顔を赤くしながら鼻を人差し指で擦る。

「着替え。終わったらここから出るぞ」

「うん」

航は私服に着替え終わると部屋を出る準備をする。

準備といってもただ荷物バックを肩に掛けるだけで後はちよっとベッドが汚れていたので綺麗に整頓しておいた。

「忘れ物はないか？」

「多分大丈夫」

「多分って……。じゃあ行くぞ」

迅速と部屋を出て高層のホテルから外へ出た。

日差しが強くて眩しい。まるで夏のようなだ。

「なんか欲しいものとかあるか？」

迅速はホテルを出たちよっと先で足を止め、航に訊く。

「今は特にないな」

「そっか。まあ今日は昨日とは別の場所に案内してやるから、行きたい場所とか見つかったら言ってくれ」

そう言って迅速は歩き出し、航もその後ろに着いていく。

四月に入り、真夏のような日差しの強い太陽が出ているというのに外を歩く人は皆、厚いコートを着ている。

気温は相変わらず冬のようだ。息を吐くと薄ら白い煙が見える。

春はまだ来ないのか――。

歩いてから十五分くらいすると、ショッピングセンターについた。

航たちはメンズファッション専門店がある三階へと向かう。

「それにしても柄に合わない服装してるよな」

店に入るなり迅速は航をジロジロ見てそう口にする。

「別に関係ないじゃん。俺の勝手だし！」

「ちよつとは人の目を気にしろ！　んー、こんなのがいいんじゃないか？」

「派手すぎ！」

迅速が勧めてきたものは、ヘビ柄に銀ラメのドクロ模様が装飾されているジャケット。

こういうのは普通、ホストか……DQN？の人が着るものだろう。

絶対俺に似合わないし――。

人の目を気にしろと言われたものの、逆に迅速のセンスを疑ってしまふ。

「大丈夫だ。髪型を何とかすればいける！」

「そういうもの！？」

航は髪型まで貶されたような気がし、内心落ち込んだ。

「冗談だけだな。……おっ！　これだこれ！」

迅速は選んだ服が似合うか航の目先に出して確認する。

「おお。やっぱこれがピンと来るな！　だろ？」

「まあ、いいと思うけど」

その服を見て航は納得する。

冗談というのは最初に選んだ服の事も含まれていたらしい。

「それじゃあこれで決まりな！」

「ちょっと待つて！ 俺、そんなにお金ないし…」

「いいんだよそんなの。これは俺からのプレゼントってことで
やった！ ラッキー！」

「っじゃなくて。…何で、俺に…？」

「んー、そう言われてもなあ」

航は疑問に思った。

なぜ知り合ったばかりの他人に物を買ってあげようとするのか。

しかもチラッと値札が見えたが、値段が万を超えていた。

そんなの受け取っても逆に困る。

「服とかはいいから別の場所に案内して！」

迅速の背中を強引に押して、航たちはその店から出た。

数歩先にある案内板の前に立ち止まり、迅速は口を開ける。

「どっか寄りたい場所あるか？」

迅速は案内板を見ながら航に訊く。

ここに記されている中から選べということだろう。

しかし、いきなり訊かれてもすぐには答えられない。

航が「んー」と躊躇う中、迅速は何か決まったようであ内板から目を離す。

「航、腹減ってないか？ もう十四時^{じゅうし}だっていつのに俺ら起きてから何も食ってないじゃん？」

「あー、だね。俺もお腹空いてるかな」

お腹を押さえて腹減ってますを伝える。

実を言つと本当はお腹空いてるなんて嘘。

ただ、迅速がそうらしいので氣遣ったのと、行き場所が見つからなかった為、そう答えたのが事実だ。

「えーっと…、七階だな」

そうして二人は七階のレストラン街へと向かう。

七階へ着くと迅速は「ここがない」「ここもか」などと呟きながら店を探し回る。

「仕方ねえ。ここにすつか！」

そう選んだ店は、高級でもない普通のレストランだった。

迅速は高いものが好きなんだとばかり思っていたので意外だ。

店に入り、席に着くと迅速は上着を脱ぎ始める。

「意外と店の中暑いな。あ、俺はもう決まってるから。好きなもん頼んでいいぞ」

航はメニューを取り、確認する。

お腹はそんなに空いていないから軽いものを…、と。

「それじゃあこれにするかな」

「おう」

呼鈴を鳴らし、決まったメニューを店員に伝える。

数十分くらい経つと料理が運ばれてきた。

「お前、そんなもんでいいの？」

「小食だからね。いただきまーす」

航は嬉しそうに、頼んだ帆立貝のクリームコロッケに手をつける。

しかし迅速は頼んだハンバーグを不満気に見つめていた。

「食べないの？」

「俺さあ、実はカツの方がよかつたんだよねえ」

口調が微妙にチャラくなっている。

自分から頼むものを決めた上で店に入ったのに、ものが出た後に文句か。

思わず『子供かッ!』と口に出すところだった。

店を探し回っているときにぶつぶつ呟いていたのが分かった気がする。

航はメニューを取り、それらしいものを探す。

「メンチカツならあるよ」

「あー、豚カツじゃないと無理なんだよね」

こいつ――。

食べ物のことになると五月蠅くなるタイプなのか――と、心の中で思った。

「ま、いつか! いただきまーす!」

そうして迅速はハンバーグを食べ始める。

航も迅速と食べ終わるタイミングを同じにしようと思事をゆつくりと進める。

そして、食事の中間辺りで迅速は航に質問する。

「そういえばさ、なんで航は本都ほんとに来たんだっけ？」

「えっ？」

不意な質問に戸惑う。

「き、昨日言っただじゃん」

「だから、何だったっけ？」

迅速は質問の答えを質問で返す。

「だから……」

どう答えればいいのかだろうか。

昨日言っただ言葉を忘れてしまった。

あれ……？

「どうした？」

航の異変に気づいた迅速は訊ねる。

「あ、いや……なんでもない。いいから食べよ！」

「お、おう……」

再び料理に手をつけた航に迅速は何も言い返さなかった。

迅速も同じく残りを食べ始める。

何なのだろう……、この感じ——。

俺が本都に来た目的を思い出せなかった——。

辺りには色々な建物が並んでいて一日では見回れない程の店がある。

居酒屋、カラオケ店、ゲームセンターなど。

航たちはショッピングセンターから出ると繁華街へ向かうことにし、有名な円舞町えんぶちように来た。

「すごい人盛り……」

「俺から離れんなよ？」

「大丈夫だつて！」

そういったものの、ほんと数十歩くらい離れると見失いそうなくらいだ。

だけど並列に歩いてるから心配はないだろう。

二人はゆつくりと歩きながらそこら辺のものを見渡す。

「色々なものがあるんだなあ」

航は自分の住んでいる町とは全く異なるこの街に感心する。

「大都市の繁華街だしな。何でも揃ってるわ！」

「そうなんだ……」

「あ、そこ左に曲がってくれ」

迅速に言われた通りに左へ曲がると、車一台がやっと通れるような狭い道に入った。

ここも混雑しているかと思ったがそうでもなく、今来た通りよりは安心して歩けそうだ。

「航。ここに入ってみるか！」

航は迅速が指差す方に顔を向ける。

「T・I・A・R・A……。ティアラ？」

店の入口上に掲げられている英語を読み上げる。

ふと店の前に立っている看板に視線を移した。

指名料一、〇〇〇円、飲み放題三、五〇〇円……？

「なに、ここ……？」

「キヤ・バ・ク・ラ。」

俺の真似ッ——！？

「ば、馬鹿！ 行くわけないじゃん！ 俺まだ高校生だしッ！」

すると迅速は全力で拒否する航を見てゲラゲラと笑い出す。

「はっはっは！ 航……ここわな？ お空が、真っ暗にならないと入れないんだよ？」

迅速はまだ言っても分からない子供に教えるようにジェスチャーしながら話す。

こいつ、こいつ——。

航は眉にしわを寄せて迅速を睨みつける。

「冗談だつて！ 悪かった」

「——ったく。次また揶揄ったら許さないからな」

「ああ。もう絶対エにそんなことしない。ごめんな！」

「や、やめッ！」

ポンツと軽く頭に乗せてきた迅速の手を素早く振り払う。

「人がいっぱいいるんだぞ！？」

「別にいいだろ？ なっ！」

すると、また迅速は航の頭に手を乗せる。

「だからやめッ！」

航は魔の手から逃れるため、速足で歩き出す。

何なんだよ一体……。

迅速は話すたび俺に笑顔を見せてくる。なぜだか俺はその笑顔で虜になりそうだった。

このまま迅速と一緒にいられたら……。そんな思いが心の底から湧いてくる。

「って何考えてるんだ俺」

首を横に振り、我に戻る。

正直、知り合ったばかりなのにここまでしてくれる人なんていないので嬉しかった。

……
「……」

「あつ！ 航、ちょっとここで待っててくれ」

「えっ？」

突然迅速はそう言いだし、『HANSEL』という看板が掲げられた高級感のある店へと入っていった。

「なんだよ……ったく」

仕方なく航はその店の向かい側にある壁に凭れかかる。

何となくこの場所にも慣れた気がして辺りを見渡す。

すぐ横は十字路になっていて、道を挟んだ先には『GRETEL』という『HANSEL』とは正反対のダークな店がある。

特にその店に疑問は浮かばなかった。

だが目の前には沢山の人が歩いているというのに『HANSEL』と『GRETEL』の店が挟んでいる道を誰も通ろうとしない。

いや、通ろうとした人は何人もいたがその道を見ると皆引き返して別の道を歩いていく。

どうして誰も通らないのだろうか？　少しだけ興味の湧く疑問が浮かんだ。

しかしあれだ――。自分でも驚いたが昨日とはまるで違う。

こんな人盛りを目にしても恐怖など感じなくなっていた。

昨日の自分が馬鹿みたいだと心の底で笑う。

これは迅速のお陰だろう。

『HANSEL』に目をやると窓越しに見える迅速は迷った様子で何かを見つめている。

一体何を探しているのやら――

「!？」

不意に隣りの『GRETEL』へ目をやると、そこに見たことのある男がその店から出てきた。

黒いライダーズジャケットにそれに似た色のジーンズ。金髪で、遠くからでも分かる鋭い目つき――。

何か、……何か忘れている気がする。

男は『HANSEL』と『GRETEL』の間の道に入っていく。その入っていく後ろ姿に過去の光景を思い返され、記憶が甦った。

「――勇人!？」

男は人が通らない道の奥へと進み、航からどんどん離れていく。

このままだとまずいと感じ、まだ慣れてもない人混みの中を掻き分け、男の後姿を追いかける。

そして男はその道の先にあった角を曲がり、航もそれを追いかけるように曲がる。

しかし、角を曲がると瞬間移動したかのように男の姿は消えていた。なんとしてもその男を見つけようと航はその道の奥へと進む。道には派手な格好をしている者しかない。

ここは昨日通った夜蝶通りに似ている――。

普通の私服を着ている航は逆に目立つ存在らしく、人の横を横切るたびに目をつけられる。

歩いている最中、五人の人影が航の行く手を阻んだ。

「痛ッ！」

その内の一人に突然両腕を封じられて身動きが取れなくなる。

「おい！　なんだよ！　離せッ！」

封じられている両腕を乱暴に動かすが、相手の力の方が上でビクともしない。

抗っている中、その五人の中で一番存在感のある男が航に近づき、ニヤリと笑みを浮かべて航の顎を掴む。

「なあ僕ちゃん。ここ、どこだか分かってんの？　君みたいのが来るとねえ、食いたくなるんだよ……ヒヒッ」

この男が何を言ってるのか理解できなかった。しかし、昨日の悪夢が甦る。

封じられているのは腕だけ。

航は両腕を掴んでいる男の膝を思いっきり踵で蹴る。

「ぐあッ！」

男の手が離れた途端、男たちを掻き分け全力で走った。

「待ちやがれッ！」

後ろからは狩人が逃げる獲物を必死に追いかける。

航の足の速さは自分でも分からないくらい全力だったが、相手の方が速かった。

「あッッッ！」

突然後ろからものすごい勢いが押し寄せ、ドンッという鈍い音と同時に航は地面へ大きく転がった。

それは何回転したのかも肉眼では分からないくらい酷かった。

「ナイス！ 俺の跳び蹴り」

どうやら勢いは相手の跳び蹴りだったようだ。

男はゆっくりと近づいてくる。

逃げようとしても腕に力が入らない。

「馬鹿な猫だな！」

男は足で航の背中を押しつぶし、地面に叩きつける。

「——ッ！——！」

それは痛いというものではない。それを通り越し、息を吸うのもままならない程だ。

後から追いついた存在感のある男は地面に倒れこんだ航に近づくとその前に踞む。

すると髪を強く引つ張られ、強制的に顔を上げさせられる。

男の目は普通ではないくらいに見開いていた。

「なあ、俺たちから逃げられるとも思ったあ？ ばあああか！」

その瞬間、頬に強い刺激が走る。

一瞬の事で何だかよく分からなかったが段々頬に痺れを感じ、殴られたことに気づく。

「さあて。これからどうするよ？」

男がそう言ったときだった。

「お前らを殺す——」

その男の後ろから聞き覚えのある声が聞こえ、見るとそこには迅速がいた。

「……迅速」

迅速の表情は普通ではない。

怒っているでもなく、脅している……でもない。

これから本当に殺してしまうのではないかと思わせるような目つきをしていた。

「なんだお前？ 俺たち相手に勝てると思ってんの？」

男等はクスクスと笑い合う。

すると迅速が足を前に出した。

近くにいた男の顔面にストレート。その横にいた男にはハイキック。
「てめえ、何してんだッ！」

それをみた他の三人は一斉に迅速に襲い掛かる。

しかし迅速は構えのポーズをとり、相手の動きを確かめる。

「オラッ！」

殴りかかってきた男の攻撃を綺麗にかわす。

直後、目の前に棒のようなものが迫る。

それは殴りかかった次の男が出した右脚。

迅速はそれを平然と避け、笑みを浮かべる。

「喰らえッ！」

三人目の男は両手で右、左、右と迅速の顔面を目掛けて殴る。

——が、手応えはない。

「次、いいか？」

迅速はその男に向けてそう口にする。

男には何の事かさっぱり分らない。

次の瞬間、男の脇腹に強烈な激痛が走った。

ミドルキック——。

当たった場所は急所だった。

男は受身すらできずに地面へ飛ばされるように倒れる。

「オラアアア！」

次に襲いかかってきた一人には左脚で突き蹴りし、相手が前屈みになった瞬間、右膝を顔面に噛ます。

反動で男はブリッジを描くように倒れた。

「てめえ……。ブツ殺す！」

残った男はポケットから果物ナイフを取り出し、そのナイフを前に突進を仕掛ける。

迅速もそれに合わせて勢いをつける。

「迅速、危ない！」

危険だと感じた航は叫ぶが、迅速には届かない。

男との距離が一メートルもなくなったとき、右脚を前へ出した。

フェイント――。

その脚は相手に与える攻撃ではなく、相手のベルト上に掛かり、もう片方の左脚が相手の左肩に乗る。

そして左脚を勢いよく蹴り、空中へ。

人間は重力に引つ張られるため道具無しでは空中に留まることは不可能。

二階から何も無しで飛び降りるとしたら一秒も掛からない。

迅速はそんな一秒のわずか〇・一の世界で男の急所を確かめる。

男は空中へ飛んだ迅速の顔が今まで見てきた中で一番の恐怖に感じた。

背景の陽が黒い影を生み出し、そのギラッとした瞳はまるで……。

ギラついた瞳と目が合った途端、ブンツ！と風の切る音が鳴る。

右脚を相手の顎に目掛けて大きく振り上げた。

サマーソルト――。

迅速はその勢いで宙を一回転し、地面に着地する。

「クソが」

その言葉と同時に男も勢いよく地面に背中をついた。

辺りはしんと静まり返る。

五人は地面に倒れたまま動く様子もない。

まるでアニメの戦闘シーンを見ていたかのように思えた。

「大丈夫か？」

迅速は航のところに駆け寄り、航の腕を肩に掛けてその薄暗い通りから外へ移動した。

見渡す限り、緑が生い茂っている。

どうやらここは公園らしい。

それにしても巨大な公園だ。

田舎の來万智では考えられない。

航はあれから迅速に連れられてこの公園へとやってきた。

迅速は航をベンチへ座らせるなり、「はぁ」と溜息をついて、怒鳴り声を上げた。

「何やってんだよッ！ 待ってるっていったらどうが！」

「だって勇人が——」

「勇人？！」

しまった——。

言い訳をしようと、つい言葉を漏らしてしまった。

しかし勇人と口にした途端、急に迅速の表情が変わった。

それは、何かを知っているような……。

「痛ッ！」

さっき男に吹っ飛ばされたときに負った腕の痛みが今になってまた痛み始めた。

「ちよつと待ってる。今薬局行ってくるから」

迅速はそう言うのと走って薬局を目指していった。

航は痛みのある腕を押さえながら椅子の背に凭れる。

痛みを和らげるため、自然の音を聞こうと耳を澄ます。

サアアー！

どこからか滝の流れる音がする。

鳥の声や草木の靡く音——。

痛みの事なんてすぐに忘れることができた。けれど、勇人という名前を出したときの迅速の様子が気になる。

あれは、絶対に何か知ってるよな……。

「絆創膏買ってきた」

「びっくりしたぁ」

もう少し時間掛かると思っていたので、こんな早く戻ってきた迅速に吃驚する。

どうやら迅速は走って来たようで、息をハアハアと吐いていた。

「走っていかなくても良かったのに」

「んなわけいくか！ ちよつと腕貸せ」

すると迅速は強引とやっていいのか、航の右腕を掴み、袖を捲りだす。

「っち。もう痣になつてやがる」

迅速は小声でそんなことを口にしながら傷があるところに絆創膏を貼りつける。

「こつちもか？」

右腕の手当が終わるとそう問い掛けられた。

しかし、答える前に迅速はもう片方の左腕を掴んで袖を捲り、絆創膏をつける。

「これでよしと……。もしかしてお前、脚も怪我してるんじゃないか？」

「いや、大丈夫だよ！」

「いいや、念のためだ。ちょっと見せろ」

そして迅速は脚までも見てくれた。

この人にはお手上げだ。何でも見透かされるのだから。

脚に絆創膏を貼りつけてくれる迅速を見ながら航は口を開く。

「ねえ、迅速」

返事はなかった。

だけど傷の手当ては続いている。

話しは聞いているだろう。

航は話の続きをし始めようとする。

「勇人のこと——」

「——知らん」

即答——。

迅速は話しの間に割り込み答えた。

俺が何を訊こうとしたのかを知っていたかのようにだ。
だが、迅速は俺を見ていない。

「俺の目を見て答えて欲しい」

「なんでそんなことしないとならん？」

「本当に勇人のこと知らないの？」

航は迅速の言うことを無視して問い詰める。

すると、迅速は突然航を強く抱きしめた。

「な、に……？」

「なあ。そいつのこと、そんなに大事なのか？」

迅速はトーンの落ちた声を口にする。

それは、迅速らしいとは思えない様子だった。

もし、運命が初めから決まっているものだったら俺は知りたい。

この先、どうなるのか。どうすればいいのか。

俺は何のために、誰のために生きているのか。

それは、時が進めば見えてくるのだろうか。

そして、その時はどのように動くのだろうか。

運命とは一体……。

『なあ、そいつのことそんなに大事なのか？』

寒い風が吹いている公園――。

人気のない場所に二人はいた。

一人は自分の思いを寄せようとする人。

もう一人はその思いに応えることができず、困惑した表情を浮かべる人。

俺は、何のために勇人を追いかけている？

何も言い返せなかった――。

俺にとつて勇人は大事な人なのだろうか？

ただ俺が勇人のことを思い続けているだけで、勇人は俺のことどう思っていたのだろうか。

「俺じゃ、駄目か？」

「えっ？」

迅速は航に真剣な眼差しをおくる。

「俺ならお前を大事にすることができ。航がそいつにどんな想いがあるのか分からんけど、俺はお前を大事にする。だから、そいつのことは忘れるよ」

勇人を忘れる……。

果たして忘れることはできるのだろうか？

思い出してしまった記憶――。

俺は勇人を探すために、会う為にここへ来たのだ。

「ごめん、それはできない」

「どうしてもそいつじゃないと駄目なのか？ 理由を教えてください！」

理由――。
迅速に教えて意味があるのだろうか。だけど迅速はそれを知りたがっている。

教えるべきか――。

「…全部、俺の所為なんだ」

「？」

「高校一年の頃、勇人と俺は仲良しだったんだ。勇人は優しくて、話も合って毎日が楽しかった。でも、それをぶち壊す奴らがクラスにいたんだ」

「ぶち壊す？」

嫌なところを衝かれ、航は躊躇する。

やっぱり話すのをやめようか。

迅速に話しても意味ないじゃないか。

でも、それが罪の償いとなるなら――。

「いじめだよ」

「……」

「そして勇人は学校に来なくなっただ。全部、俺の所為だ。俺は分かっていたのに勇人を助けられなかった。恐かったんだ。大好きだったのに！」

全て言い切った後に気づいた。

目から冷たいものが溢れ出している。

無意識のうちに泣いていたのだ。

「航……」

そんな航を見て、迅速は優しく抱きしめる。

理由を訊かない方がよかったのかもしれないと後悔した。

「ごめんな。無理にそんな話させちまって。辛かっただろ？」

「く……う……。うう……」

「でもな、航。そいつが学校に来なくなったのはお前の所為じゃない」

「違う。俺の所為だ」

航は迅速を突き飛ばすようにして離れる。

「俺の所為なんだよ」

「お前の所為じゃないッ！！」

「やめてくれッ！！ どうしてそんなことが分かる？ 迅速、そば

にいたわけじゃないのに」

「それは……」

何も言い返せなかった。

俺は、最低な奴だ――。

善人ぶってるだけじゃないか。

普段は優しくしておきながら、こういうときには何も言えない。

相手に突き刺さる言葉を与えるだけ。

なあ、どうやってたらお前を慰めることができる？

分からない――。

俺にはどうしたらいいのか……。

「航――」

迅速は航の頭に手を乗せようとしたが、航はそれをすぐに拒否した。

「ごめん」

そうしないと勇人のことを忘れるかもしれないから。

つい昨日会ったばかりの迅速の優しさに航の心は揺れ動いている。

―― 恐い。再びそういう感情が出てきた。

もう二度と勇人のことを忘れたくない！

もし忘れたら…… 勇人が消えてしまう気がした。

「わかった。じゃあ、けりをつけよう」

「けり……？」

「もしお前が本当に勇人のことが好きなら俺はお前を諦める。でも、そうでなかったら俺と……、俺と一緒にいてほしい」

迅速は最後の言葉を恥ずかしそうな顔で口にする。

本当に勇人のことが好きなら……。

航は少し戸惑う。

俺は本当に勇人のことが好き……なんだよな？

「俺について来い。勇人のいる場所に連れてってやる」

「やっぱり。知ってたんだ」

「勘違いするな。」お前の知ってる勇人”じゃないかもしれないぞ”

「どういう意味だよ？」

「そういう意味だ」

俺の知っている勇人じゃない？

迅速の言ったことがよく分からなくて心の内がモヤモヤする。それから何も話すことのない無言の時間が続き、航は迅速に案内されるがままその後ろについていく。

人ごみを抜け、人のいない薄暗い道に出る。

そこは昨日、迅速と出会った夜蝶二番通りに似ていた。

その道が入って少し先にある角を曲がると路地に入り、奥にある階段を上る。

すると、裏通りと言っていいのか、確かに人は沢山いるが車が一台も通っていない道に出た。

やはりここも薄暗い。

全ては高い建物の所為だが、ここにある建物は何のために造られたのだろうか。見るに壁や窓が壊れていて使われていないものだとかる。

漫画やアニメなどではよく見るが、この国にもこんなところがあったのが不思議だ。

この国一番の大都市ならではなのだろう――。

「俺から離れんなよ」

「？」

無言の時間を解放したその一言が突然のことだったのでよく聞き取れなかった。

多分だがそんなことを言ったと解釈し、迅速から離れないようにする。

「……」

この裏通りに入ってから感じるのだが、気のせいだろうか？

道を通るすれ違いざまの人たちが此方を睨んでくるように見えている気がする。

それは自分に向けられているものなのか、それとも迅速なのか分からない。

その所為か安心はできなかった。
本当に勇人はここにいるのだろうか？ そんな疑問すら浮かんでく
る。

まだなの……？

そう言いたかったが我慢した。

道の角を曲がり、狭い道に入る。

気味が悪い――。

今来た道とは違い、人の姿がなく、二人の足音だけしか聞こえない。
無言の時間をどうにかしたかった。

何か喋ろうか。でも、何を話したらいいのか…。

早くここから抜け出したい。

航は必死に気持ちを抑えて我慢する。

「ここだ」

やっと迅速の口が開かれた。

長かったと思える狭い道を抜けると、自動車が走れる普通の通りに
出た。

だがそこはもう光の世界とは呼べない場所――。

自動車なんて走っているわけもなく、人の姿も見当たらない。

道の右側の奥には広場が見える。

迅速はその道を歩き始め、航も後に続く。

奥へ進むと小さな広場へ出た。

その広場には航たちを取り囲むような怪しい店がネオンの光を發し
て建ち並んでいる。

自分たち以外に人らしい姿はなく、広場の中央にある噴水の音だけ
が静かに聞こえる。

「ここは？」

「グロウプラザ。ここら辺の連中はそう呼んでる」

「グロウプラザ……。ここに勇人がいるの？」

迅速に問いかけるが返答はなかった。

聞こえてなかったのだろうか？

航は渋々と後についていく。

そして迅速はある店の前で立ち止まる。

店は全体が緑色にデザインされていて、看板には『Welcome to the Heaven』と掲げられていた。

「行くぞ」

迅速は店の中に入るぞという言葉を送る。しかし、店の前には扉らしいものは見当たらない。

航は、どうやって入るのか疑問に思った。

すると、迅速は店と店の間にある道に入っていく。

後を追いかけると、そこには木でできた階段があった。

航と迅速はその階段を上り、二階へたどり着く。

着いたところに木の扉があり、迅速はその扉を開いて航と一緒に店の中へと足を踏み入れる。

中は外観よりかなり狭い一方通行のバーだった。

グラス、ボトル以外は全て緑色で装飾されていてなんとも気持ちわる……いや、個性的な感じだ。

しかし狭い――。

カウンターの椅子に座ると奥へ進めなくなるぐらいだ。

迅速はそのカウンターにいる店員と話をし始める。

どこからか聞こえる音楽がその話し声を掻き消し、聞き取れない。

別にどんな話をしているのか興味はないさ。

ところで不思議に思ったことがある。

ここは二階のはずだが下にはどうやっていくのだろうか。それに、奥行きが異常に狭い。

階段を上がってきたときの長さ比べると、店の奥行きはもっとあったはずだ。

それなのに何故こんなに狭いのだろうか。

そしてもう一つ。客が一人もない。

こんな個性的な感じの店だったら客一人いてもおかしくはない。

客だけではなく、ここに来るまでの裏通りには人が沢山いたが、こ

の広場には人の姿は見当たらなかった。

そんなことを考えている内に迅速の会話が終わったようだ。すると店員はどこかへ案内する仕草をする。

「航、こっちだ」

そう言われ、店員にどこかへ案内される迅速の後ろに航はついていく。

部屋全体が緑色で装飾されていた所為で気づかなかったが、店の奥へ進むと視覚トリックの様に壁と壁の間に隠れていた扉が姿を現した。

「いつてらっしゃいませ」

扉の前に着くと、店員はそう言つて扉を開いた。

その言葉にどんな意味が込められているのかはわからない。

扉の先には下に繋がる階段があり、航と迅速はその階段を下りる。どうやら聞こえてくる音楽はこの下から掛かっているようだ。

一階に着くとそこは二階と比べものにならないくらい広かった。たぶん五十畳くらいはある。

外から見たときよりやけに広い気がするのは気のせいかな？

航はそこにあつた光景を疑った。

目に映っているのは沢山の人の姿。

どれもみんなルーレットやスロットを楽しんでいたり、トランプや賽など賭け事を行っている者もいた。

まるでカジノだ――。

「驚いたか？」

「う、うん。まあ……」

「このことは秘密だぞ？ 外に情報漏らしたら……。狙われる、とだけでも言っておく」

迅速は途中で何か言うことを躊躇い、違う言葉に置き換える。

大体理解はできるから「大丈夫」と返した。

そしてその人の間を通つて奥へ進む。

広間を抜けると薄暗くて細い通路に入り、その先に見える古い金属

製の扉の前まで歩く。

扉の前へ着くと迅速は躊躇せずその扉を押し開けた。

ギィィィ。

耳に響く音が鳴ると、扉はゴォォン！と音を立て完全に開く。

最初を感じ取ったのは臭いだ。そこは体育館倉庫のような臭いがする小さな部屋だった。

その部屋の中央に吊るされているオレンジ色の電球がそこに居る者を照らし出している。

そこには数人の男たちが一つのテーブルを囲って座っていた。

男たちの手にはトランプ。その囲っているテーブルには札束――。

どうやらこの人たちも賭け事をしていたらしい。

航はそこにいる数人の男たちの顔を一人一人見ていく。

「なんか用？」

一人の男がそう口にした。

航は目を凝らしてその男を見つめる。

それは、必死に探し求めていた男だった。いや、まだ断言はできない。

男たちは全員こちらを見つめている。

航はどうしたらいいのか分からなくなり、困惑する。

「――！？」

突然、頭に優しく”何か”が乗った感覚がして一瞬混乱した。

優しくて、大きなもの。

その”何か”は、迅速の大きな手だった。

「こいつがお前に話があるって」

「……ふうん。で、なに？」

勇人らしき男がまじまじと此方を見つめてくる。

「話したいことが、あるんだ」

「だったらここで言えよ。それが、ここでは言えない話とか？　だっせえ」

男はそう言つと関係のない側にいた男たちまで大声で笑い始めた。

まるであの時みたいな様だ。

「——ごめん」

「……？」

「あの時は助けられなくてごめん！」

航はそう言つて頭を下げる。

「何言つてんのこいつ？」

近くにいた男はそう言つと再び笑いが起こるが、勇人らしい男はミリの笑いも見せずに航を見つめていた。

「おい、勇人？」

「え？ ああ」

やはり勇人なのか——。

近くにいた男がそう言つた。

勇人はそばにいた仲間に名前を呼ばれ、その場の雰囲気に戻る。

「勇人。俺のこと、覚えてる？」

航は雰囲気負けじとそう問いかける。

すると勇人の表情が少し固まった気がした。

「何だよこいつ。勇人知ってるやつか？」

勇人は数秒黙り込み、口を開いた。

「知らねえよ。こんなやつ」

その言葉を聞いた途端、意識がおかしくなるような感じがした。辛くて、胸の奥が痛い。

何もかもが考えられなくなるくらいに——。

「おい。大丈夫か？」

迅速に声を掛けられハツとする。

気づかないうちにブーツとしていたようだ。

「用が済んだならさっさと出て行ってくれないか？」

勇人の放つたその言葉に航は何も言い返すことができなかった。

「……ごめん。迅速、帰ろう」

「いいのか？」

航は迅速の問いかけを無視して踵を返す。

いや、無視ではない。ただそれ以上何も考ええず、声が出せなかったのだ。

「……航」

一瞬、小さい声で誰かに名前を呼ばれた気がする。

でもそれは求めていた人の声ではない。すぐ隣にいる迅速が出した声だった。

航は来た道をゆっくりと歩き出す。

「迅速、お前——」

「勇人。お前、変わったな」

迅速は勇人の話を掻き消すかのようにして口を出す。

そして航は迅速とその部屋を後にした。

「またのお越しをお待ちしております」

店員の挨拶と同時に店の外へ出る。

「うひゃー！ もうこんな暗くなっちまって。今何時だ？ オヤジ

ー！」

「……」

「ま、まあ気にすんなよ！ っても無理かもしれんけど……」

迅速の言葉は、無音のように航の耳に入らなかった。

それほどまでに勇人の言ったあの一言が衝撃的だったのだ。

辺りは既に闇に覆われている。

まるで今の自分のようだ——。

俺は、一体……。

「——ッ！？」

突然肩に痛みが走る。それは迅速が無理やり組んだ腕の所為だった。

「ここから出るぞー！」

「あつ、危ない！」

「大丈夫だって！」

迅速は暗くてよく見えない階段を肩組みながら降りようとする。

その所為……いや、そのおかげで此方に注意を払い、先程の事を少しずつ忘れていった。

辺りは闇に包まれているが、周りにある建物のわずかな光が道先を教えてくれる。

そして迅速と一緒に広場から街へ。街から小さな公園に移動する。公園に着くとそこには誰もいなかった。当たり前だ。

街灯に照らされたブランコに二人は座り、小さく漕ぐ。

キィ。キィ。

この音がどんなに寂しいものなのか、理解できる人はいるのだろうか？

そんなことを迅速は考えていた。

不意に航が口を開く。

「あれ、俺の知ってる勇人だよな？」

「……さあな」

やっと迅速の言った言葉の意味が今理解できた。

『お前の知ってる勇人じゃないかもしれない』

確かにそうだった。あれは俺の知っている勇人じゃない。

でも、勇人なんだ。

最後に言われた言葉が脳裡に甦る。

『知らねえよこんなやつ』

思い出したくなくても思い出してしまい、涙が溢れ出してきた。

「うう……っ」

「お前、良い奴だよ。よく今まで耐えてきたな」

迅速は優しい口調で言う。

航はそんな迅速にしがみつき、泣いた――。

忘れない。

こんなに辛いとは思っていなかった。

今までの思いをぶちまけたい。

誰に？

誰にでもいい。

そばにいる人。

そばには誰がいる？

温かくて、優しい人。

それは、誰——？

俺の、いつもそばにいた人は…。

眩しくて、温かい。

それは太陽のような光。

過去の記憶がその光によって呼び起される。

まだ諦めるには早いんじゃないか？

やっぱり、勇人に逢いたい。

航は迅速の胸の中で思いつきり泣いた。泣き続けた。

忘れるために泣くのではない。

これから先を歩み続けるために、邪魔な気持ちを流すために泣くんだ。

泣いてからどれくらいの時間が経ったのかは分からない。

けれど、迅速のお陰で気分がスッキリした。

「ありがとう」

「……いや」

迅速は小さな声で返答する。

「でも、ごめん。やっぱり俺、諦められない」

「……そうか。わかった！俺もやれるべきとこまで付き合っぜ！」

「迅速……」

「まあ悔しいけどよ。俺がいらないとお前、何もできないだろ？」

その言葉を聞いて嬉しくなった。

やっぱり迅速は優しい。

これから先、ずっと一緒にいたいと思えた。

大切な友人として——。

「——っと、忘れてた」

迅速はジャケットの脇ポケットから何かを取り出す。

「これ」

取り出したものは迅速の手に収まるくらいの小さな黒い袋だった。

「さつき服買ってやれなかったからよ。代わりに」

恥ずかしい表情を浮かべながら、迅速は航にその袋を手渡す。

「開けてもいい？」

「ああ。気に入るかはわからんがな！」

航はその袋を開けると掌に中身を出した。

出てきた物は如何にも高そうな銀色に輝くリングのついたネックチエーンだった。

「すごい…。これ、高かったんじゃないの？」

「値段なんか気にすんな！」

「っあ」

迅速は航の手からそのネックチエーンを取り、それを航の首に付ける。

どうしてここまで優しくしてくれるのだろうか。

昨日知り合ったばかりなのに……。

昨日……か。

なぜだか迅速と共にした時間はそれよりも長く感じた。

「おお、似合うなあ！ やっぱり俺の目は正しかったぜ」

「ありがとう、迅速」

「いいってことよ！」

迅速は笑顔で親指を立て、グッドポーズをとる。

航もそれをみて笑顔を浮かべた。

久しぶりな気持ち——。

もう二度とこんな表情は出せないと思っていた。

だけど、出すことができたんだ。

航は久々の笑顔を思いつきり浮かべた。

「おお。やっと笑顔見せたな！」

嬉しそうに迅速も笑顔を浮かべる。

迅速のおかげだよ——。

恥ずかしさもあり、航は胸の内を礼を言う。

「ねえ。このリングって何か意味とかあるの？」

「え！？ あ、ああ気にすんなッ！！」

何故か迅速は顔を赤くする。

「あ、そういえばお前どうするんだ？ これから。泊まるところ決めるのか？」

迅速は質問を流すように別の話題を持ち掛ける。

しかし……。

日帰りを考えていたので宿泊先のことなど考えてもいなかった。

「はーん。その顔は先のこと考えてなかったって顔だな」

顔に出ていたのかは分からないが言ってることが当たっていたので何も言い返せなかった。

「俺んどこ、来るか？」

「迷惑、じゃない？」

「むしろ逆。一人暮らしで寂しかったし、だから大歓迎だ！」

「じゃあお言葉に甘えて……」

そうして航は迅速の家へ泊まることにした。

昨年建てられた鉄骨造アパートに汚れや傷はない。

航はその綺麗な二階建ての四戸アパートの前にいた。

一階の一〇一号室のドアに近づくと、センサーライトが反応する。

画期的だ――。

「汚い家ですがどうぞ。お客様」

「お邪魔……します」

「そう堅くならんくていいって！」

「うん。ごめん」

中に入ると良い香りが漂っていた。

どうやら収納棚の上に置いてあったお香がその匂いの元らしい。

玄関は特に汚いわけでもなく、綺麗にされていた。

「ちょっと俺その店寄ってくつから中で待っててくれ」

そう言くと迅速は航を残して走っていった。

「自分勝手だなあ」

独り言を呟きながらも靴を脱ぐ。

遠慮なく部屋の中に入ると先程口にしたこととは違い、部屋は綺麗に整頓されていた。

しかし、意外だ。

迅速の顔からしてモノクロが好きそうに思えたが、部屋は明るいもので装飾されていた。

勝手に部屋を漁るわけにもいかず、航は中央にあるテーブルのそばに座る。

何をすればいいのだろう…。

部屋の所々見回すが、やはり綺麗だ。

俺の部屋とは全然違う。

綺麗好きなのかな？

そんなことを考えながら辺りを見回しているとドアの開く音が聞こえた。

もう帰ってきたのかと思ったが、部屋に入ってきたのはバスタオルを巻いた上半身裸の見知らぬ男だった。

「うおっ！？ びっくりしたー」

それはこちらのセリフでもある。

男は目を見開き、小さな声でそう口にした。

しかしそれはすぐに平静を取り戻し、何も気にせず男は近くにあった冷蔵庫を漁り出す。

航はそんな男を見て混乱する。

迅速、一人暮らしだって言ってたけど……。もしかして、家を間違ってたんじゃない？

「あのー…」

「っあー！ うめっ！ お前も飲むか？」

男は漁りだした缶ビールを航に見せる。

「いや、結構です」

「そうか」

「あの…」

「んー、何かいいもんねえかなあ」

人の話を聞いてない。

「これでいいか」

男はツマミらしき物と缶を手にテーブルを挟んだ航の前に胡坐を組んで座る。

近くで見ると、たれ目をしてるがそれなりに整っている顔つきだ。

スパイキーショート黒髪で、男前な感じ。

「あの——」

「あー待った！ 今当てて見せる」

またかと思ったが、男は妙なことを言い出す。

何を当てて見せるというのだろうか？

「今お前が思っているのは、どうして俺がここにいるのか、だろ？」
そういうことか。

どうやら俺の言いたかった事を当てようとしたらしい。

残念ながら当たりではない。が、外れたともいえない。

「ええと、少しはあつてるかな」

「なんだよ少しはって！ まあいいや。俺の名前は誓だ。一条誓。」
イチジョウセイ

この家の人と幼馴染ってゆうね」

「そう、なんだ」

だからとは言わないが、この家にあがっていたことがわかった。

「お前は？」

「俺は、夏原航」
ナツハラ

「ふーん。航、かあ。スカウトでもされたの？」

「え？」

その時、玄関のドアが開く音が聞こえて迅速が帰ってきた。

「コーウ。良い子にしてたかあ？」

「よっ！」

「ってなんでお前がいるんだよッ!!」

まるでコントのように迅速は家にあがり込んでいる誓にツッコミをする。

「いやあ、うち今ピンチでさ」

誓は両手を合わし、申し訳ないというポーズをして口にする。

「嘘つくな。人気ナンバーツーのお前が何言ってる」

「ああ、ツーだよツー! ナンバーワンになれないツーだよ!」

「お前少し黙つとけ。ああ、それと金は貸さねえからな」

「なッ!!」

誓はガツクリと頭を下げ、それから言葉を発することはなかった。

「こいつのことは気にしなくていいぞー、航」

「え、ああ。うん」

なんの話をしてるのか……。

今さっき誓さんの言ったスカウトという言葉がその話に結びついてくるが。

「それよりもどうだ!」

迅速の両手には大きなビニール袋が握られており、それを航の前にドサツと置く。

中身が袋の外まで溢れていて確認するまでもなかった。

袋の中には大量の肉が入っていた。それも高級な物ばかり――。

「今日だけ特別に奮発してみたんだ」

「す、すごい。ははは」

全然笑えない――。

袋を見るとスーパーで買ったみたいだが、その中の量が容赦ない。

「これ、全部でいくらしたの?」

「ん? えーとなあ。確か八万だったかな」

「……」

呆れてどう突っ込めばいいのかわからなく、声すら出てこない。

スーパーの買い物で八万なんて初耳だ。

店の肉を全部買取ってきたのではと思わせる。さぞかしレジをした

店員も驚いただろう。

なぜ八万円分もの肉を買ったのかもわからない。

そもそも迅速はお金の価値を知らないのだろうか。

「どうした？　驚いて声も出ないか！？」

「べ、別に。てかこれ今日で全部食べるわけじゃないよね？」

「そうだよ。三人でも今日中には無理に決まってる。

「当たり前だ！　食べるに決まってる！」

「これだもん——。」

大体迅速がどんな人なのかわかってきた気がする。

航はわざと突っ込みを控え、残った分を迅速に食べさせようと考えた。

「そして、このためにもう一つ買ってきた物があるんだ」

迅速はそついうと部屋を出て何やら玄関に置いてあったものを持ってきた。

「ジャーン！　これぞ焼き肉用の『焼肉屋さんスーパースペシャル・ウルトラデラックス』だ！　俺ってなんて準備の良い男なんだ」

「自分を褒めてるとこ悪いんだけど、それこのテーブルより少し大きいよ？」

「それがどうかしたか？」

「え……」

迅速のことわかった気がしたって思ったけど取り消し——。

この男はよく分らない。

頼れそうな一面がある反面、こういった天然が混じっていると理解に苦しむ。

「お皿を置く場所ないから」

「……………ああああああ！！！！　とでも言うと思ったか？」

「今言っただじやん」

「まあ外を見てみる」

「外？」

迅速はベランダの方に指を指す。

明るい黄色のカーテンが閉まっていて外の様子はわからない。

航は閉まっていたカーテンをゆっくりと開いた。

「すげえだろ？」

自慢をするかのような口調で迅速はそう言う。

カーテンを開くと、そこには庭が広がっていた。

庭の中央には大人数用のログテーブルと丸太椅子が備え付けられている。

ログテーブルの長さは三メートルくらいで、隣りの一〇二号室の庭との間にある。

「すごいけど、隣りの家の人に迷惑じゃない？」

「気にすんな。隣りはこいつの部屋だから」

迅速は親指で誓の方に指をさす。

「そうなの!？」

「ちなみに上の二〇一号室も俺の部屋だから」

なんという……。

部屋が一つだけじゃ物足りない理由があつたのだろうか？ にして

も家賃は二倍なんだろうな……。

お金持ちは羨ましい――。

「ほら、準備すんぞ」

迅速は航の頭にポンツと手を乗せ、庭へ向かう。

いちいち頭に手を乗せないでほしい……。

「誓さん、そんなところで落ち込んでないで一緒に食べましょう!」

航は部屋の隅で小さく蹲っている誓に声を掛ける。

すると誓は、まるで蜘蛛のような歩き方と早さで航に近づき、両手を握る。

「ひいっ!」

「航くん。君は優しいよ。優しすぎるよ! あの男と違って」

ビックリした……。

誓はそう言つと庭にいる迅速を睨みつけた。

「誰があの男だ。大体お前なんで人の家勝手に上り込んで勝手に冷

蔵庫漁って勝手に酒飲んでんだよ」

「いいじゃねーか。幼馴染なんだし？」

「だから金借りれるとも思ってるのか。つかお前、先月三百だろ？ それどこにいったんだよ」

「そ、それわだな…。さ、航くん。俺たちも準備しようか！」

迅速の話を逸らすようにして誓は台所に向かう。

自分には関係のない話だが、少し気になった。

それから三人は準備をする。

テーブルには紙皿にコップ。メインの肉に野菜。そして焼き肉屋さんスーパースペシャル・ウルトラデラックス。

準備よし、と。

「それじゃ、航と出会った記念に——」

「ちよつと待つて！」

航は隣りに座っている迅速の話を止める。

「俺と出会った記念？」

「ああ。お前と出会った記念にだ」

「なんか、変じゃない？」

「変じゃねえよ。人と出会って、その出会った日を記念にする人はいるだろ？ 赤ん坊が生まれたら生まれたその日が記念になる。それと同じようなもんだ」

そうなのか？

ちなみに出会ったのは昨日だけど、…まあそうなのかもしれない。こういう感じで祝杯されるのは初めてだったから変だと感じたのだろつ。

迅速にとってはそれが普通なんだ。

「はいはい。そろそろ俺も悲しくなるから乾杯しようぜ」

二人だけの会話に弾まない誓は口を出す。

「あつ。ごめんなさい」

「べ、別に。つか、敬語使わなくていい…」

誓は恥ずかしそうに頭を掻きながら言う。

航は笑顔で返した。

そして三人は自分たちのジョッキを手に持ち、上へあげる。
「ほんじゃ、気を取り直して。航との出会いに――」

――乾杯ッ！

俺たちの出会い。

それは探し求めていた出会いとは違っけれど、嬉しかった。
これから先、一人ぼっちではないのだ――。

嘗ては、この国一番の安全と信頼を得られる公共施設だった、ラス・テイエ病院――。

今となつてはその名も口にされない。

何らかのトラブルにより院内は燃え盛る炎によって何もかもが失つた。

取り残された患者の数は百数名。

救急隊が中に駆けつけた時には既に無惨な光景が広がっていたという。

数十年経った今では、一部の人の手によって綺麗に修復されている。中は相変わらず、落ちない黒い炭の所為で辺りは薄暗いが、気にはならない。

まして、この方がここに住み着いている者たちにとっては丁度良いらう。

一階の奥にある小部屋。

部屋のプレート看板には『特 室』と表記されている。

焦げた跡で真ん中にある字が読めないが、特別室なのだろう。

「寝て、ないんスカ」

一人の女性が、その部屋の窓から外を眺めている男性に話しかける。

「ノックぐらいしろよ……」

男は振り向かずとも溜息交じりな声で言う。

「スイマセン。開いていたもので」

女は気づいていた。

昨夜から男の様子がおかしいことに。

だから確かめに来たのだ。

男は何も口にしない。ただ、晴れた空を眺めている。

「何か、あったんスカ。勇人さん」

女がそう口にする。

勇人は外を眺めたまま、口を開こうとはしなかった。

何か変なことにでも巻き込まれたのだろうか？

それとも体調が悪いのか。

勇人が気に掛かる女が口を開こうとした時、勇人の口が開いた。

「カレン。お前は俺のこと、どう思ってる？」

「なっ！　なななんスか急に！？」

不意な質問にカレンは戸惑いを隠せなかった。

しかし、それは誤魔化す為のものだと気付く。

「一体何があつたんスカ」

カレンの強情に呆れた勇人は、やれやれと溜息を吐く。

「昨日、迅速に逢ったんだ」

「迅速さんに…？」

「それも、俺のよく知っている人を連れてな」

よく知っている人——？

カレンは思い当たる人物を想像する。

誰だろう？　思いつかない。

その、よく知っている人という言葉が気に掛かる。

「それで、迅速さん何か言つたんスカ」

「…お前変わったな、だつてよ。フツ、笑えるぜ…。俺は何も変わ

っちゃいねエ。あいつが変わつたんだ」

勇人は憎むような声で言う。

「数ヶ月前の、ことつスよね」

カレンの不意な発言に勇人は固まる。

「あつし気づいてました。数ヶ月前から二人の様子がおかしくなっ

たこと。それに迅速さんが姿を見せなくなったのも——」

「お前には関係ない！」

勇人はカレンの話を遮断する。

その言い方は怒鳴られるよりも別の、恐いものを感じた。

でも、関係ないはずがないのだ。

勇人は何かを隠している——。

この話題は今出しても無駄だろう。

カレンは別の話に切り替える。

「今、あつしらの状況は危険です。何故この状況になったのかはあつしには分かりませんが、情報が外部に漏れる前に始末しないと……」

「ああ、わかつてる。みんな揃ってるんだろ？」

「はい。あとは勇人さんの指示を待つだけです」

「……そうか。わかった」

そう口にすると、勇人はようやく窓から目を離して振り返った。

勇人と目が合う。

その目は以前とは比べてまるで別物――。

鋭い目は仲間であるカレンさえも動揺させるほどのものだった。もしかしたら、もうあの時の勇人ではないのかもしれない。

「明日だ」

「えっ？」

カレンはいつの間にか気を取り乱していた。

「明日、決行だ――」

「は、はい。了解です」

勇人は指示を出し、部屋から出て行く。

カレンはその背中を見送った。

今日は久々に気持ちよく眠れた気がする。

ゆっくりと目を開くと、一番始めに思った言葉。

外を見ると朝という感じではない。

ぼんやりとした意識の状態で昨晚のことを思い返す。

焼き肉をして、一通り食べ終わると片づけに入って、それから部屋でまた……。

部屋の中を見回すと昨日のことが嘘のように思える。

そこらへんの床にはゴミが大量に散らばっていて机は飲み物や食べ残し物などでいっぱいだった。

そんな中、迅速と誓はごみに囲まれながら鼾もかかずに熟睡している。

普通は寝顔を見ると可愛いと思うのだろうが、迅速の寝顔はかっこよく見える。

迅速は一体何の仕事をしているのだろう。

昨日の話からすると、やっぱりホストとか…？

航は迅速の寝顔を間近で見ながらそんなことを考えていた。

「……ん。うわッ!!」

「いつ……てえ……」

目を開けると視界を埋め尽くすほどの大きな顔があり、迅速はそれに驚いて後ろへ飛び退く。

しかしそこには生憎、誓がいて巻き込んでしまった。

「あ…、なんかごめん」

「おいおい、起こすならもっと目覚めの良い起こし方してくれよ」
迅速は頭を掻きながら言う。

「それはこっちのセリフだ。……痛エ」

起こすつもりはなかった。と言えはどう返ってくるのだろう。何れにせよ面倒なので口には出さなかった。

三人は数分程だらだらすると、部屋に散らばっているゴミの片づけに入った。

昨日見なかった物まで部屋に転がっている。

一体どこから湧き出てきたのだろうか。

航は一キ口程あるんじゃないかと思わせるほどの大量のゴミを両手にゴミ箱へ捨てる。

「ふう…。あとは掃除機かけるだけだね」

「そうだなあ」

「あれ、誓さんは？」

辺りを見回すと誓の姿が見当たらなかった。

「もう来るんじゃないか？」

「おまたー」

迅速が言った直後、掃除機を持った誓がベランダから入ってくる。
なぜ、掃除機を……。

「おう。サンキュウサンキュー」

「つかあれだ。お前掃除機ぐらい買え！」

「炊飯器のない奴に言われたくないな」

「なっ！！」

どうやらこの家には掃除機がなかったらしい。

迅速は誓が持ってきた掃除機の電源を入れ、床に散らばっているものを片づける。

あとは任せればいいか。

航は暇潰しにテレビの電源を入れる。

黒い画面から映し出されたのは、この前やっていたドラマの再放送だった。

テレビの横に置いてあるリモコンを取ろうとした時、不意にラック棚に裏返しされた写真立てが目に入った。

それを手に取り、引っくり返す。

一枚の写真――。

知らない制服を着た人たちが並んで写っていた。

その下には3 - 1 中学校卒業と記されている。

どうやら中学卒業のクラス写真のようだ。

写真の中の人たちは皆、笑っていた。

暗い表情やムスツという表情をした者はいなく、全員が笑っている。
みんな、仲が良かったんだろうな。

迅速、中学の頃と全然顔が変わっていない。一人だけ大人びている。
誓さんは同じクラスではなかったのかな？

それにしてもみんな本当に楽しそうに笑っている。
迅速の隣にいる人も。

「……えっ？」

その顔を見た時、航の口から一言が漏れた。

——なんで？ よくわからない——。

一瞬だけ頭の中が真っ白になる。

「なに見てるんだ？」

航が何を見ているのか気になった誓は、頭を覗かせるようにして手に持っていた写真を見つめる。

「わお！ 秋庭^{アキハ}顔変わってないな」

「ん？ なに見てるんだ？」

二人して何を見ているのか気になった迅速は航の手からその写真立てを奪うようにして取る。

「あつ、馬鹿！ まだ見終ってないっつーのに」

「あー、これか。懐かしいな」

迅速は誓を無視して写真を見つめる。

「迅速、それ……」

航が問いかける。

「これがどうかしたか？」

「その、迅速の隣りにいる人って……？」

航に言われて迅速は写真に写っている自分の隣りの人物を見る。

「それ、勇人だよね……？」

「……」

返事がない。

迅速の隣りに居たのは勇人だった。高校の頃とは少し違うが、紛れもなく勇人なのだ。

なぜ迅速は答えようとしなかったのか分からない。その所為で苛立ちが込み上がる。

「答えろよ。隣りにいる奴は勇人なんだろ？ どうして勇人がいるんだ？」

「そうだ。なぜ勇人がいる——？」

航の住んでいる場所は本都から離れた場所にある田舎町。そこにある高校で勇人と知り合った。

だから、なぜ勇人が本都に住んでいる迅速と同じ中学校だったのが分からない。

元々勇人は來万智の人ではなかったということ…？

「もし、この俺の隣りにいる奴は勇人じゃないと言ったらお前は信じるか？」

迅速が口を開く。

勇人じゃ、ない——？

「ふざけんな！ そいつは勇人だ！ 俺が間違えるはずがない！」

「ちよつと航落ち着いてさ。俺にもよく分からないんだけど。どうしたん？」

突然の二人の心境の変化に理解できない誓は、まず航を落ち着かせて何があつたのか迅速に問い質す。

しかし、航の感情の変化は異常だった。

航は誓に抑えられた腕を思いつき振り払う。

「勇人じゃないってなんだよ一体……。そいつはどう見ても勇人だろ！」

「だから落ち着いてさ。お前も黙ってないで何か言ったらどうなん？」

「……ああ、すまん。航、お前今高校二年生だろ？」

迅速は冷静な口調でそう質問をする。

「それが勇人と何の関係があるんだよ！ 俺は勇人が何でそこに写っているのかが知りたいだけだ！」

人がここまでおかしくなっているというのに迅速はどうして冷静な態度でいられるのか。

だが、それは俺を苛立たせる行為にしかない。

迅速は何も答えず、細くした目で航を見つめる。

「さつさと答えるッ！」

我慢できなくなった航は、今まで出したこともないくらいの怒鳴り声を上げた。

——言ってしまった。

言っではいけない言動だとは分かっていた。

どうしてここまで怒鳴る必要があったのだろう。

その言葉を発してからから気づく。

俺は、勇人の事に対して敏感になりすぎていたんだ。

だって仕様がないだろ？ 勇人の事が『好き』なのだから…。

でも、もっと良い方法があったはずだ。俺が、迅速に冷静になつて聞くべきはずだったんだ。

全部、俺が間違っていたんだ――。

「…ごめん……」

その言葉を聞いて迅速は笑みを浮かべた。

「いや。俺はお前に気付いてほしかったんだ。お前は勇人の事になると突発的になりやすいからよ。だから、こうするしかなかったんだ」

「……うん」

「お前、本当に勇人の事が好きなんだな」

迅速の声には、笑みの中に悲しみが混じっていた。

航は自分の行動を反省する。

さっきまでの自分だと、もう一度勇人にあつてもまた昨日の様におかしくなるに違いなかった。

しかし、迅速のお陰で自分を知る事ができたんだ。

自分のいけないところを、自分で見つけ出すことが――。

「黙ってて悪かった。今からこの事を話すが……。悪いがジヨウは一旦家を出てくれないか？」

「なッ！！」

「悪い。二人きりで話したいんだ」

「そ、そそそうやっていつも俺を！ このッ、バカヤロオオオオオオオ！！！！」

そう言つて誓は走つて家を飛び出していった。

部屋の中はしんと静まり返り、二人だけの世界となる。

「航。今から話すことは嘘もない本当の話だ。できればその話をし

ている間、口を挟んでほしくない。それを約束できるか？」

迅速の表情、話し方からしてそれは自分にとって、きついものだと察する。

それでも聞きたい。写真に写っていた勇人のこと。勇人の過去のこととを。

今の自分なら大丈夫。そう自分に言い聞かせ、航はゆっくりと頷いた。

吹き抜ける風は水よりも冷たく、闇へ吸い込まれる。
ゲームでいう裏ルートを通った先にある小さな広場。
光から疎遠された闇のそこは、グロウプラザという。

ここまでの道のりが頭の中に留まっていて良かった。いや、ここま
で来るのに怪しい者に阻まれなくて良かったというべきか。
航はその薄暗い広場にいた。

やはり人の姿は見られない。

噴水奥にネオンの光が点灯している店がある。

見当たらない人たちはその店に集まっているのだろう。
というより、何で俺はここにいるのだろう。

今さら後悔しても遅い。自分から足を踏み出したことなのだから。
航は噴水奥にある緑色の店に足を運ぶ。

天国への入り口――。

ドアを開けると昨日とは変わらない光景が広がっていた。
相変わらず、中を見ると気持ち悪くなりそうだ。

カウンターにいる店員はグラスを拭いている。

「どんな御用ですか？」

カウンターに近づくと、店員が問う。

「あ、あの……下に行きたいのですが……」

緊張して声が震える。

通してもらえるだろうか？

「畏まりました。ではこちらへ」

店員はあっさりと案内してくれた。

奥にある隠された扉。

「いつてらっしゃいませ」

その言葉と同時に扉が開く。

店員は笑顔で航の背中を見送る。

開かれた先にある暗い、長い階段――。

一段……。また一段とゆっくり降りていく。

下に行くにつれ、脚や手が震え、心臓の動きも早くなる。

一人で来なければ……。一瞬、そんな思いが浮かんだが、すぐに首を横に振る。

自分勝手な行動で踏み入れたのだから自分で何とかしないと駄目だ。歯を食いしばり、階段を下りだす。

明かりが見え、航は一階へと来た。

昨日と全く変わらない光景。

コインの流れ出る音、ルーレットの玉が流れる音、カードをシャッフルする音、笑い声。

外で見られなかった分、満席になるくらいの人の数。

それにしても女性の姿が見当たらない。

貴婦人のような人がいてもおかしくはないはず。

気にはなったものの、航は昨日迅速と訪れた奥の部屋に向かう。

「……？」

辺りを見回しながら歩いていると賭け事をしている者たちと目が合う。

それも一人や二人ではない。

擦れ違ったたびに幾ど……。いや、全員が此方に顔を向ける。

気のせい……？ ではない。

不気味に感じたが今はそれどころではない。

航は気にせず、奥にある部屋へ向かった。

薄暗い通路の先にある金属製の扉。

ここに、勇人がいる――。

航は躊躇うことなくその扉を押し開けた。

ギィィィ。

やはりこの音には慣れない。

扉を開けると部屋の中を見回した。

中央には五つの椅子にテーブル。そこに男が五、六人。

しかし、勇人と思える人物の姿が見当たらない。扉の音に気づいた男たちは航を見つめていた。

すると、一人の男が笑みを浮かべ、航に近づく。

「なんか用かな？」

男は航のそばに近づくと笑顔でそう問い掛ける。

それに対し航は危険を感じて一、二歩後退りする。

「勇人は……？」

「勇人？ あー、今どこかに出かけてるかなあ」

「どこに？」

「さあなー。なんで勇人に会いたいんだ？」

「わかりました。もう結構です。失礼します」

航は勇人がいないと分かると男の問いかけを無視し、一秒でも早くここから出ようと踵を返す。

「おい待てよ」

腹立たしい態度に男は航の肩を強く掴む。

「離せッ！」

航は掴まれた男の手を振り解き、急いで駆け走る。

通路から広間へ――。

「おい、そいつを捕まえろ！」

後方から追いかけてきた男がそう叫ぶ。

すると、先ほど賭け事をしていた全員が航の行く手を阻む。それも笑みを浮かべて――。

「残念でしたー！ 君はもうここから出られまっせーん」

近くにいた二人組みが航の腕を片方ずつ掴み、自由を奪う。

部屋から追いかけてきた男が近づく。

脚は抑えられていないので腕を振り解けば何とかなるだろう。

だが、この状況では逃げ切ることは不可能に近い。

どうすればいい……。

蟬谷から汗が流れ落ちる。

「さあて、これからどうしよっか？ 顔良いし、殺すのは勿体無い

よなあ」

男はそう呟きながら航の顎に人差し指をやり、その指を下に擦り落としていく。

顎から胸へ。胸からお腹の中心に。

指は臍の辺りで止まる。

「みんなこいつをどうしたい!？」

男は周りを見回し、そう叫ぶ。

「「食え! 食え!」」

周りにいる者は皆、同じ言葉を何回も繰り返す。

男は笑みを浮かべて航を見つめる。

「だによ？」

耳元でそう囁き、航の首筋を舐める。

一瞬だけ温かく、気持ち悪い。

「や、めろ……」

「なに? 感じちゃってるの?」

ぎらついた瞳に甘い声でそう問い掛けられる。

周りからは次という声が飛び交う。

「「食え! 食え!」」

「それじゃあ、頂きますか!」

そういうと男は航の着ていた服を無理やり破き、白い肌が曝される。

綺麗な白い肌――。

周りの者は見惚れて歓声を上げる。

「……こいつ、やべえ代物だ」

男は航の曝された部分を見た途端、野獣の目みたいに大きく見開く。

それを目の当りにした航は恐怖を感じ、必死に心の中で助けを求め

る。

男の手は、航の胸に触れる。

「……ッ!」

出そうとしてもいないのに変な声を発してしまう。

「感じるだろ?」

耳元に甘い声が囁く。

男は同じ行為を何度も繰り返した。

「……めて、くれ」

「なに？」

「や、めろッ！」

「フッ。やめるわけねえだろ」

厭らしい手は下に擦り落ちていく。

指でなぞられたところからゾクゾクと鳥肌が立つてくる。

男の手はやがてベルトの方に。カチャカチャと音が聞こえだす。

「やめ——ッ!？」

抵抗の言葉を出す瞬間に、何者かに口を押さえつけられて声がこもる。

息がしばらく、咽せそうにもなる。

視線を下に向けると、ベルトが外れ始めていた。

男はゆっくり、スルスルと航の身に着けているベルトを外していく。

勇人ッ！ 迅速ッ！

両腕を掴まれ、声も出せない状況の中、航は二人に助けを求めた。

「ぐあッ！」

塞がれていた口元の手が外れ、すぐそばから声が聞こえたと思うと、腕を掴んでいた二人の男が倒れ出した。

航は身体が解放され、目の前の男に蹴りを入れる。

反動で男は地面に倒れ込み、航は逃げる体制に入る。

しかし、相手が多い。

どうしたら……。

「走るぞ！」

そう声が聞こえたと同時に、何者かに腕を掴まれ引つ張られる。振り解こうにも掴んでいる手の力が強すぎて逆に力が入らない。

航は引つ張られるがままその速度に足を合わせ、裏口から店を出た。

「ちよつと待つて」

航は掴まれている手を振り解き、息を整える。

突然の相手のペースに足を合わせ、息が辛かった。

「立ち止まるな！ 追っ手が来る！」

店から出られて助かったと思ったが、忽ち腕を引っ張られグロウプラザから抜け出す。

十数分ほどして街に出る。

やっと掴まれていた手が外れ、解放された。

あまり運動をしていなかった所為か、体力の限界で息が上がり咽せる。

「はあ、はあ……ごぼッ」

「悪いな。急がせてしまつて」

航は疲れながらも顔をあげ、目の前にいる人物の顔を確かめる。

つい、迅速が助けに来たのだと思っていたが勘違いだったようだ。

男の顔は見知らぬ顔で、三十代前半に見える。

薄い青色のスーツに迅速と同等の高身長。

この人は一体……。

何がなんだか理解できない。それを察知したのか男は口を開く。

「すまない。私の名はリオナルド・ウォルト。特殊部隊の一人だ」

トーンの低い声。

リオナルド・ウォルト。外国から来た者だろうか？ それよりも、

「特殊部隊……？」

「ああ。しかし、詳しいことは言えない。秘密組織だからな」

——秘密組織。

その言葉に何か不安を感じた。

航はリオナルドに質問する。

「あの、何であんなところに居たんですか？ それに、俺を助けてくれたの？」

「言つたら、特殊部隊だと。潜入捜査だ」

リオナルドは腕を組んで答える。

「潜入……」

「君が襲われたあの時、ここらの連中ではないと気づいたのでね。」

だから襲われている君を助ける為に連中等の仲間のふりをして君の側に近づいたんだ。息、大丈夫だったかい？」

先ほどのことが脳裡に甦る。

あの時、口を塞いだ人はこの人だったのか。

「どうやら君はあそこの連中に目をつけられているらしい」

「え？」

「グロウプラザだよ」

「あ、はい……。でも、なんで俺が……」

航は考える。

どうして俺が目をつけられているんだ？

昨日、迅速と来た時は何もなかった。

でも、今日は違った。

なぜ……？

「詳しいことは私にも分からないが、……そういえば君は何故あんな危険なところへ来たんだ？」

不意な質問に戸惑う。

もしかすると、この人に訊いてみると勇人の事が何か分かるかもしれない。

でも、特殊部隊という言葉が引つ掛かる。

「別に……、ただ入ってみただけだよ。そっちは何の潜入捜査なの？」

航はちゃんとした答えを返さず、逆に問い掛ける。

「私か？ うーん……」

リオナールは自分を指さすと、顎に手を当て考え事の仕草をする。

やはりこれも極秘なのだろうか。

数秒した後、男はゆっくり顔を上げ口を開く。

「勇人という男を捜している」

「なん、だって……？」

その言葉を聞いて、驚きを隠せなかった。

なぜこの人は勇人を探しているんだ？

今さっき男の言った言葉が浮かび上がる。

——秘密組織

まさか、…警察——！？

終業式の時、まだ警察は勇人を捜していると耳にした。

「どうした？」

航の様子が気になったリオナールは問い掛ける。

「あ、いや。なんでその勇人って人を捜してるの？」

「ん？ ああ、ちよつと会ってみたいと思ってね」

「会って何か意味あるの？」

「君は相手を問い詰めるのが好きなようだな。もしかして、君もその男を捜しているのではないのかい？」

気づかれた——。

航は混乱して何も言い返せなかった。

その様子を察したりオナールは口を開く。

「なら、私と一緒に捜さないか？」

リオナールにそう言われ、困惑する。

もし、この人が警察だったら？

それだけが頭の中で引つ掛かっていた。

「あんた、警察だろ！ 勇人をどうする気だ？」

リオナールは警察と言われて驚いたのか、目を大きくする。

「フツフツ。君、おもしろいね。私は特殊部隊の一人だが、警察とかそういう類ではない。ただ勇人という男と会って話したいだけだ」

「…話？」

「ああ。だから君も協力してほしい」

警察ではない。協力すべきか——。

しかし、この男は何か企んでいるのではないか？
でも勇人に会いたい。

会って、”本当の事”を訊き出したい。

リオナールといれば勇人に逢えるかもしれない。

航はリオナールを信じてみることにした。

「明日の昼にここで落ち合おう」

リオナールはそう言うのと去って行った。

「…これからどうしよう。家飛び出してきちゃったからな……」

航は独り言を呟くと、「はあ」と小さな溜息を吐く。

迅速に会うのが気まずい。…というより、ここはどこだろう？

それに、道行く人が変な視線で此方を見ている気がする。

「…ん？ 航……？」

どこからか聞き覚えのある声がした。

周りを見回すと、そばに誓の姿があった。

「やっぱり。こんなところで何してるんだ？ もうあいつの話終わつたんか？」

「え、ああ。うん」

誓の言う”あいつ”とは迅速のことだろう。

航はさり気のない返事をする。

「つーかお前、その服どうしたんよ？」

「えっ?!」

誓に言われて気づく。

あの時に破られていたことをすっかり忘れていた。

周囲の人が出していた変な視線はこれが原因だったんだ。

今になって恥ずかしさが込み上がる。

「そんなんじゃ上着あっても寒いだろ。俺の貸してやるよ」

「あ、ありがとう……」

航は誓の貸してくれた赤い上着を着る。

「お前、あいつの家戻るか？」

「そうしたいけど、道が分からないし……」

「おいおい。俺の住んでる場所昨日教えてもらっただろう」

「そうだったね」

誓が歩きだし、航もその後に着いていこうとした時、不意に誓の足が止まる。

「あー、そうそう。一つ言いたい事があるんだけど、忠告みたいな

もんかな」

「？」

「てつきりさ、スカウト掛けられた人なのかと思ったけど。お前、

”あいつとあんまり関わらない方がいい”ぜ」

——あいつとあんまり関わらない方がいい？

迅速と関わりを持つってこと？

どうして……。いや、先程の迅速の話を振り返るとそう考えるのが普通だろう。

でも、それだと勇人まで関わりを持つってことになる。

それだけは絶対に避けたい——。

誓さんの言う関わらない方がいいという言葉には、別の意味が込められている気がする。

航は、誓の後について行く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7752y/>

Laco ~ 僕らの運命 ~

2011年11月27日13時29分発行